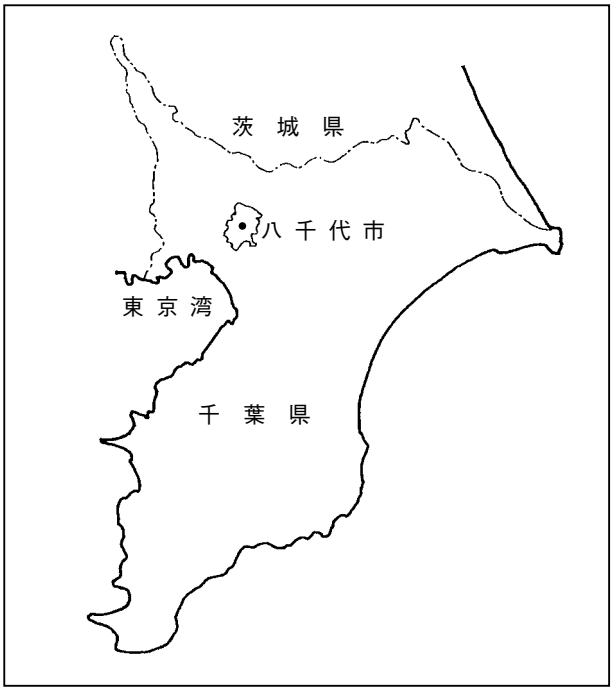
千葉県　八千代市

桑納前畑遺跡ｂ地点

発掘調査報告書



２０１０

八千代市教育委員会

凡　　例

1．本書は、八千代市桑納に所在する、桑納前畑遺跡ｂ地点の第１次本調査と第２次本調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は八千代市教育委員会が実施した。

3．調査遺跡の所在地、期間、調査原因等は、下記のとおりである。

遺 跡 名　桑納前畑遺跡　ｂ地点

所 在 地　八千代市桑納字丸畑97番３ほか

調査原因　福祉施設建設

第１次本調査

調査期間　2009（平成21）年３月16日～2009（平成21）年３月24日

調査面積　14.61㎡

第２次本調査

調査期間　2009（平成21）年８月18日～2009（平成21）年11月４日

調査面積　389.94㎡

4．整理作業及び報告書作成作業は､2010（平成22）年１月12日～2010年３月31日までの期間行なった。

5．本書の執筆・編集は、宮澤久史が行なった。遺構の一部と遺物の写真撮影は高屋麻里子、図版作成等の補助は小弓場直子・桂田肇・林侑紀・岡田雪江が行った。

6．出土遺物、実測図及び遺物写真等の資料は八千代市教育委員会で保管している。

7．本書に使用した地形図は、2,500分の１八千代都市計画基本図を使用した。

8．各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。

縄文土器・陶磁器・その他…１／４　　拓影図・断面図…１／３

9．本書中に使用されているスクリーン・トーンは、焼土及び磨石の擦れ面を表す。

10. 発掘調査及び整理ならびに報告書作成に際しては、関係各機関及びに内外の多くの方々にご指導、ご協力を頂きました。記して深く謝意を表します。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会　八千代市立郷土博物館　道上文　峰村篤　高花宏行　内田武志　村田一男　齋藤弘道　成田忠志

目　　次

凡　例
目　次
挿図目次
第１章　序　説……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……2
　第３節　遺跡の位置……2
　第４節　調査の概要……3
第２章　調査された遺構と遺物……5
　第１節　縄文時代……5
　第２節　中世以降……28
第３章　成果と課題……32

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　桑納前畑遺跡ｂ地点周辺地形図……1
第２図　遺構配置図……3
第３図　遺構配置図２……4
第４図　001D ……5
第５図　002D ……7
第６図　002P ……9
第７図　003P・004P・005P ……11
第８図　006P・007P・008P・009P・012P ……13
第９図　011P・013P・014P ……14
第10図　015P・016P ……15
第11図　017P・018P ……17
第12図　017P（２）・018P（２）・020P ……18
第13図　021P・022P ……19
第14図　023P ……20
第15図　025P・026P ……21
第16図　026P（２）・027P ……23
第17図　027P（２）・028P ……24
第18図　028P（２）・029P・030P・032P ……25
第19図　031P ……27
第20図　001M ……28
第21図　001M（２）……29
第22図　１号土坑・２号土坑・001I……30
第23図　002I・002M・……31

第１章　序　説

第１節　調査にいたる経緯

第１図　桑納前畑遺跡周辺地形図（１=5,000)

取り扱いの協議から確認調査まで　平成21年１月15日、社会福祉法人八千代翼友福祉会理事長篠原文男氏（以下「事業者」）から八千代市桑納字丸畑の土地について福祉施設建設に係る「埋蔵文化財の取扱いについて」の確認依頼文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。対象地は市遺跡 No.53 桑納前畑遺跡の範囲内であり、現況は畑で、対象地及びその周辺に遺物も多く散布していた。また、過去、近隣地点の調査では遺構が検出されていた。このことから、市教委は、遺構が検出される可能性が高いと判断し、遺跡が所在する旨を同年１月に回答した。この回答を受け、事業者と市教委との間で埋蔵文化財の取り扱いに対する協議を行い、確認調査が行われることになった。同年１月に事業者から文化財保護法（以下､「法」と略）第93条の届出が提出され、市教委は法99条を提出し、準備の整った１月29日に確認調査を開始した。

確認調査から本調査まで　確認調査は、市教委が、平成20年度市内遺跡発掘調査事業として、平成21年１月29日～２月16日の間、実施した。確認調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡、土坑、奈良･平安時代の掘立柱建物跡、中世～戦国の溝等を検出し、対象地ほぼ全域に遺構が所在することが明らかになった。その後、市教委と事業者間で埋蔵文化財の取り扱いの協議が進められ、盛り土による現状保存が可能な地区は現状保存の取り扱いを行い、掘削が深くおよび、現状保存が困難な地点に関しては、記録保存の措置として、発掘調査が開始された。調査は、第１次本調査として平成21年３月16日～３月24日までの間14.61㎡を行ない、第２次本調査として平成21年８月18日～11月４日までの間389.94㎡を行なった。何れの調査も八千代市の平成20年度及び21年度民間開発等発掘調査事業として、八千代市が直営調査として実施することになった。

第２節　調査の方法と経過

第１次本調査　確認調査及び取り扱いの協議の中で現状保存不可能な地点のうち取り急ぎ掘削工事が行なわれる14.61㎡についてが対象となった。調査対象区域を重機で表土除去作業を行い、表土除去後、ローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については、土層観察用のベルトを適宜設定し、覆土除去を行なった。調査の進捗にあわせ、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。写真撮影にはブローニー判のモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを中心に使用し、補助的に35mmモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。実測方法としては、調査区が狭小であることもあり、平板測量を行い現況測量図に落とし込んでいった。

調査期間は、平成21年３月16日～３月24日で、16日、機材搬入及び調査区設定、現況写真撮影等の準備作業及び重機による表土掘削作業を行った。17日、遺構確認作業及び遺構調査を開始した。18日以降、遺構調査を継続し、23日、全景写真を撮影し遺構調査を終える。24日、機材の撤収等の残務を終え調査の終了となった。

第２次本調査　工事内容と照らし合わせて、現状保存（盛り土）保存ができない地点、389.94㎡についての調査となった。第１次本調査同様、調査対象区域を重機で表土除去作業を行い、表土除去後、ローム層上面で遺構確認作業を行った。検出された遺構については、土層観察用のベルトを適宜設定し、覆土除去を行なった。調査の進捗にあわせ、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。写真撮影にはブローニー判のモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを中心に使用し、補助的に35mmモノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを使用した。第２次本調査の実測方法としては、東西南北方向に合わせた任意のグリッドを設定した。グリッドの設定に関しては10m単位で設定し、各グリッド杭を基準としながら光波測距儀による測定と従来からの遣り方実測を適宜併用して行なった。

調査期間は、平成21年８月18日～11月４日までの間である。18日～21日の間、機材搬入及び調査区設定、現況写真撮影、環境整備等の準備作業を行い、21日～25日、重機による表土除去作業、25日～28日、遺構検出作業、９月１日～３日、基準杭測及び水準測量を実施し、３日から遺構調査を開始する。以後、雨天やその他諸般の事情で調査が断続的になるも、10月からは、調査が継続的に行われる。10月29日、遺構調査を終え、全景写真を撮影する。30日から、機材撤収などの残務を行い、11月２日、４日に埋め戻しを行い、調査終了となる。

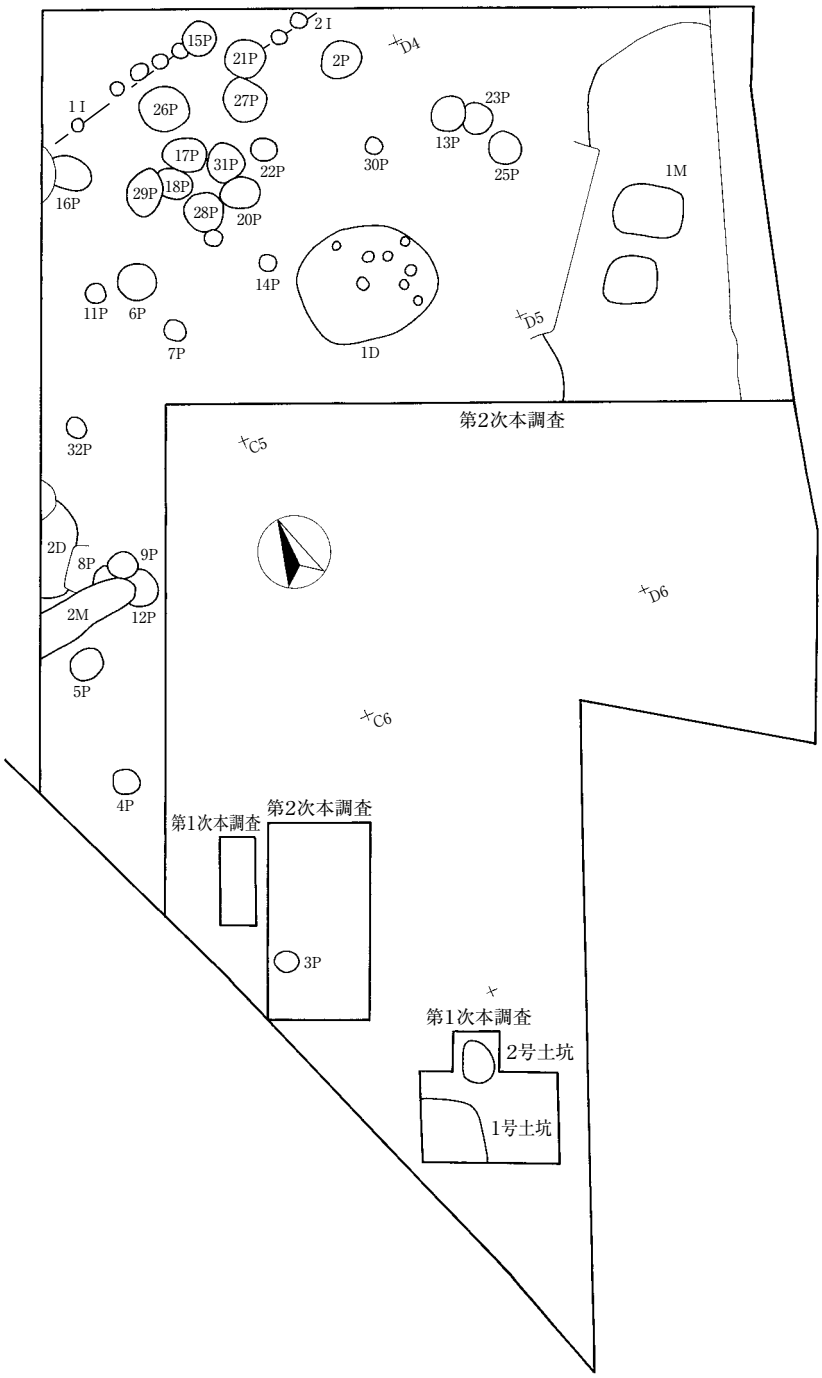
第３節　遺跡の位置

桑納前畑遺跡（１）の所在する八千代市は、千葉県北西部に位置する。八千代市の地形は、市域中央を流れ、印旛沼に西から注ぎ込む新川とその支流の桑納川によって大きく三つに区分され、さらに神崎川・小作川・高津川等の河川により、複雑な樹枝状の谷津が発達する台地が形成されている。市域の台地の一般的傾向として、南側は急傾斜で、北側は段丘状の地形を形成している。台地の標高は、14～30ｍで北東にかけて徐々に低くなる。

桑納前畑遺跡は、市域中央やや北に位置する桑納地区に所在する。新川と桑納川に挟まれた台地上の遺跡で、樹枝状に発達した小支谷に東、西、北を区切られている舌状台地に立地する。標高は約22ｍで、新川の低地からの比高差は約13ｍである。

周辺の遺跡として、本遺跡の南方には桑納遺跡、桑橋新田遺跡が隣接して展開し、これまでの確認調査によって台地先端を中心に弥生時代～奈良平安時代の竪穴住居跡が濃密に展開していることが明らかになりつつある。東方の谷津を隔てて花輪台遺跡が展開している。西方の谷津を隔て、東帰久保遺跡、東帰久保南遺跡が、北方の谷津を隔てては島田遺跡が展開している。また、本遺跡の範囲内に近世の熊野神社群集塚が存在する。

第４節　調査の概要



005P　完掘状況

006P　完掘状況

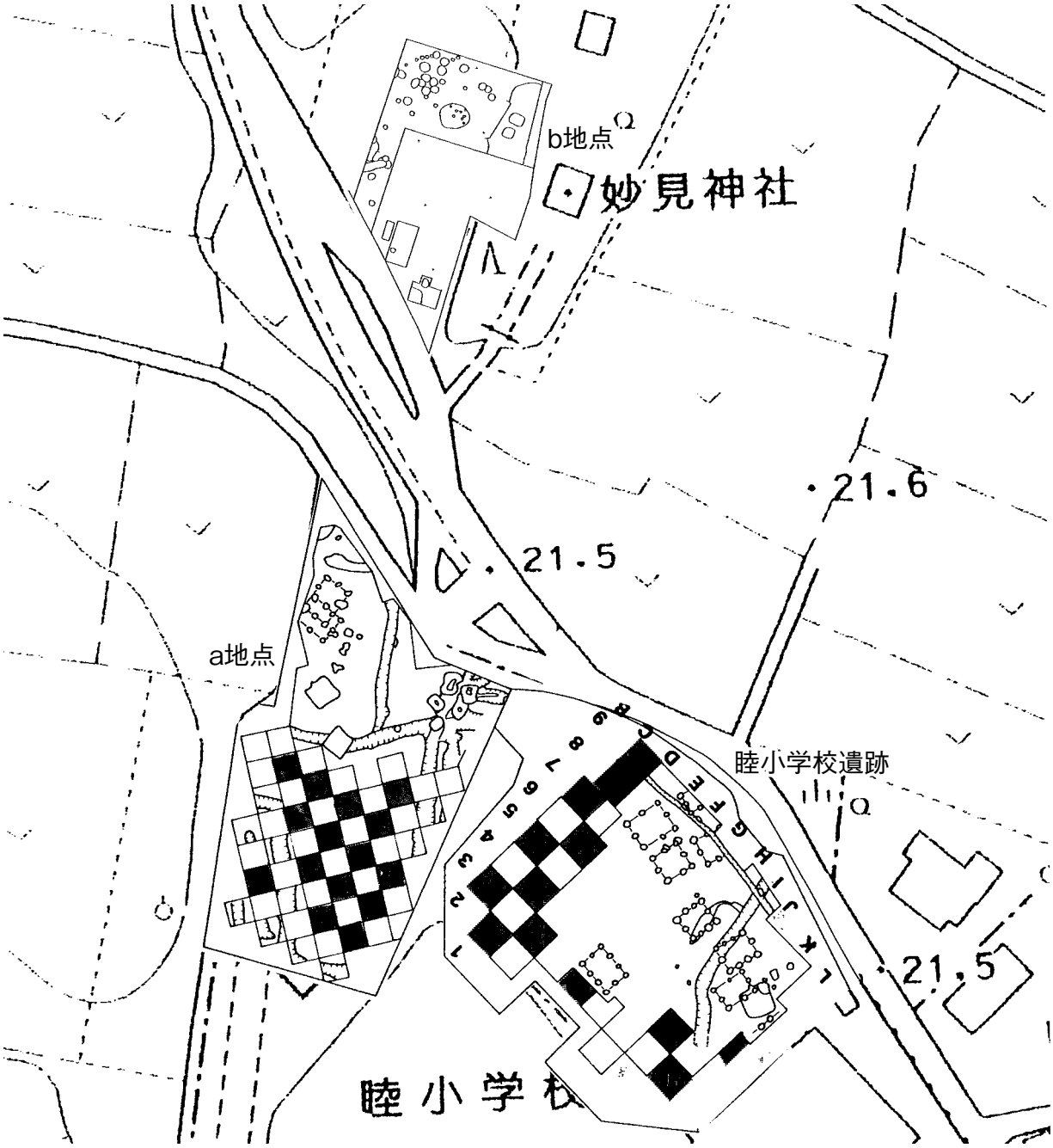
007P　完掘状況

013P　完掘状況

0　5m
(1:250)

第２図　遺構配置図

本節では、桑納前畑遺跡の過去の調査履歴に触れながら、今回検出された遺構・遺物が桑納前畑遺跡全体の中でどのように位置付けられるのか時代ごとに概観してみる。先ず、今回の桑納前畑遺跡ｂ地点で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡２軒、土坑28基、中世～戦国期の溝１軒、土坑２基、遺構２基、近世の溝２条である。また、基本的な層序は、Ⅰ層、表土、Ⅱ層、暗褐色土、Ⅲ層、ソフトロームであった。遺物包含層は検出されなかった。



第３図　遺構配置図（2）（S=1/1,000）

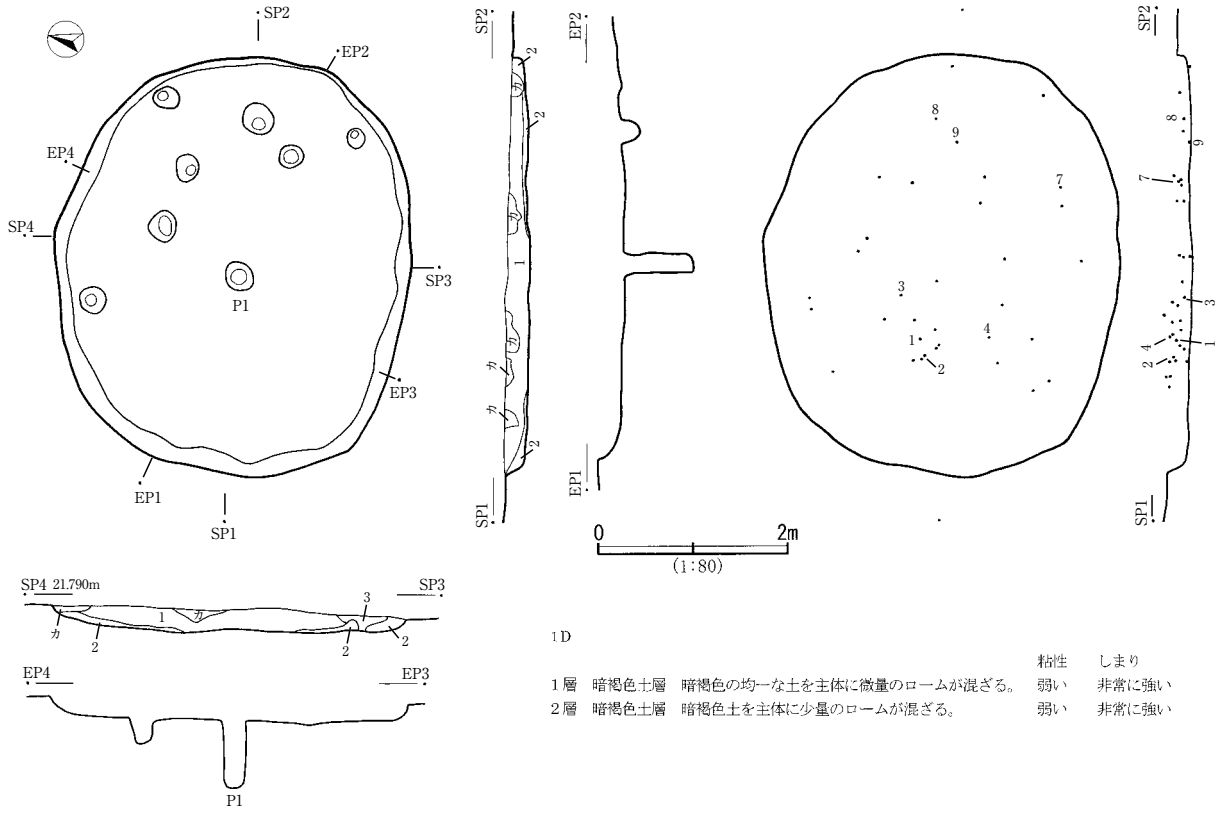
桑納前畑遺跡は、過去２地点で調査がされている。過去の調査は、先ず昭和52（1977）年に市立小学校増築に伴い調査され、53年に『桑納前畑遺跡』（a地点）として報告されている。縄文時代（中期）の土坑１基、奈良平安時代の竪穴住居跡２軒、同、掘立柱建物跡２棟、時期不明の溝５条、同、土坑19基を検出している。次いで昭和53（1978）年にa地点南側隣接地を『睦小学校遺跡』として調査され、56年に報告されている。奈良平安時代の竪穴住居跡１軒、同、掘立柱建物跡９棟、中近世の溝３条、時期不明の土坑８基、その他を検出している。

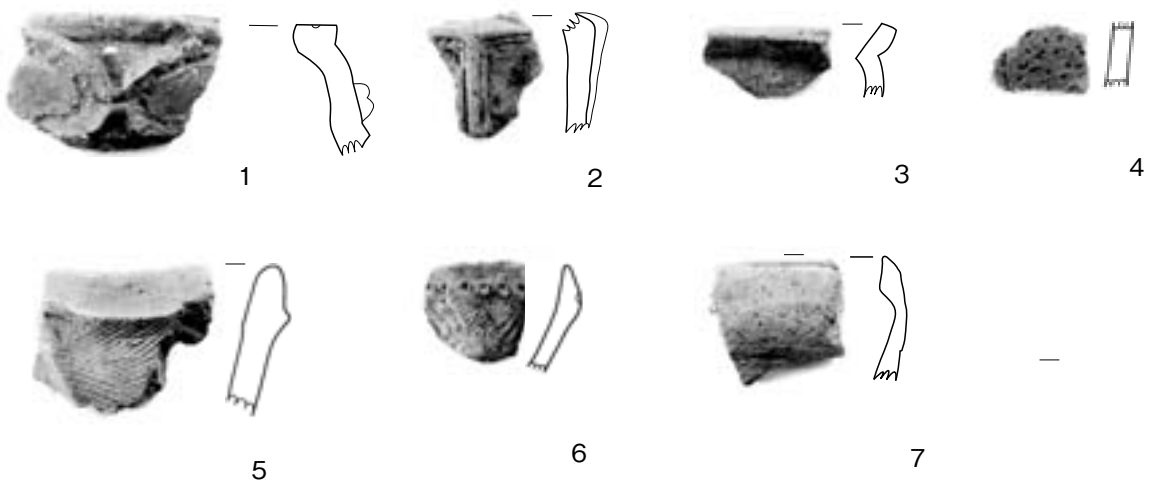
今回の調査地区であるｂ地点は、過去２地点の北方至近の場所に位置している。過去２地点においての縄文時代の所見は、縄文土器は少量出土しているものの検出された遺構は、土坑１基のみであった。また、戦国～中世に特定できる遺構の存在は報告されていない。奈良・平安時代中心の遺跡の印象を受けるが、今回のb地点では、むしろ奈良・平安時代の所見は少なく、縄文時代と中世～戦国期の遺構・遺物の検出・出土を見た。調査地点が数百ｍ離れているだけだが、遺跡の様相が異なっている状況を捉えることができる。

第２章　調査された遺構と遺物

第１節　縄文時代

第１項　竪穴住居跡





第４図　001D

１．001Ｄ（第４図）

検出地区　Ｄ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、014P、030Pなどに近接している。

遺　　構　長軸（東西）4.40m×短軸（南北）3.75m。深さ0.24mの楕円形の竪穴住居跡である。床はハードロームの上面を平坦にした、しっかりとした床である。壁もロームの壁でなだらかに立ち上がる。掘り込みは浅く、東側の立ち上がりは、ほとんどなかった。

付属施設　住居跡中央にしっかりした小穴（Ｐ１）を検出し、柱穴と考えられる。以外は、浅い窪み状のピット、７基を検出した。炉及び周溝は検出されなかった。

覆　　土　基本２層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　住居全体の覆土中から少破片を中心に少量出土した。覆土下層以下では小破片であるが阿玉台式土器が比較的多く出土している。

１～４は何れも縄文時代中期、阿玉台式土器である。１は、深鉢口縁片で、平縁で内弯する。口唇に１列の角押文を施し、口縁部も微隆起の内側に１列の角押文を施し、内面には稜を持ち、磨きこまれている。色調は暗褐色で、焼成は良くない。胎土に多量の雲母を含む。２も、深鉢口縁片で平縁。２列の角押文を施し、やや内弯し、磨きが施されている。色調は暗褐色で焼成は普通である。胎土に少量の雲母を含む。３も、深鉢口縁片で、平縁で外面は外側に屈曲し、内面は陵をもち内弯する。内外面とも無文。色調は暗褐色で、焼成は普通。胎土に少量の長石、石英、微量の雲母を含む。４は、深鉢の胴部片で、外面は棒状の工具によって全面に刺突を行なう。色調は暗褐色で、焼成は普通。胎土に少量の雲母を含む。

５～７も縄文時代中期後半（加曽利E式期）の土器である。５は、深鉢口縁片で、波状を呈する。狭小な口縁部無文帯があり以下を微隆起による区画を行い区画内にLR縄文を充填する。内面は磨かれている。色調は暗褐色で、焼成は普通。６も深鉢口縁片で、平縁。外面は内側に屈曲し内面はやや内弯する。狭小な口縁部無文帯があり下端を円形の連続刺突による区画を行い以下RL縄文を充填する。内面は磨かれている。色調は橙褐色で、焼成は普通。７も深鉢口縁片で、平縁。内側は陵を持ち、やや内弯する。外面は無文部であり、内面は磨かれている。色調は暗褐色で、焼成は普通。

また、覆土中から黒曜石の剥片が２点出土した。

所　　見　覆土の観察と出土遺物及び遺構の規模･形態から阿玉台式Ｉｂ式期～Ⅱ式期の竪穴住居跡（或いは竪穴状遺構）と判断した。

２．002Ｄ（第５図）

検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区南西側に所在し調査区外へ続いている。北側は撹乱を受けている。

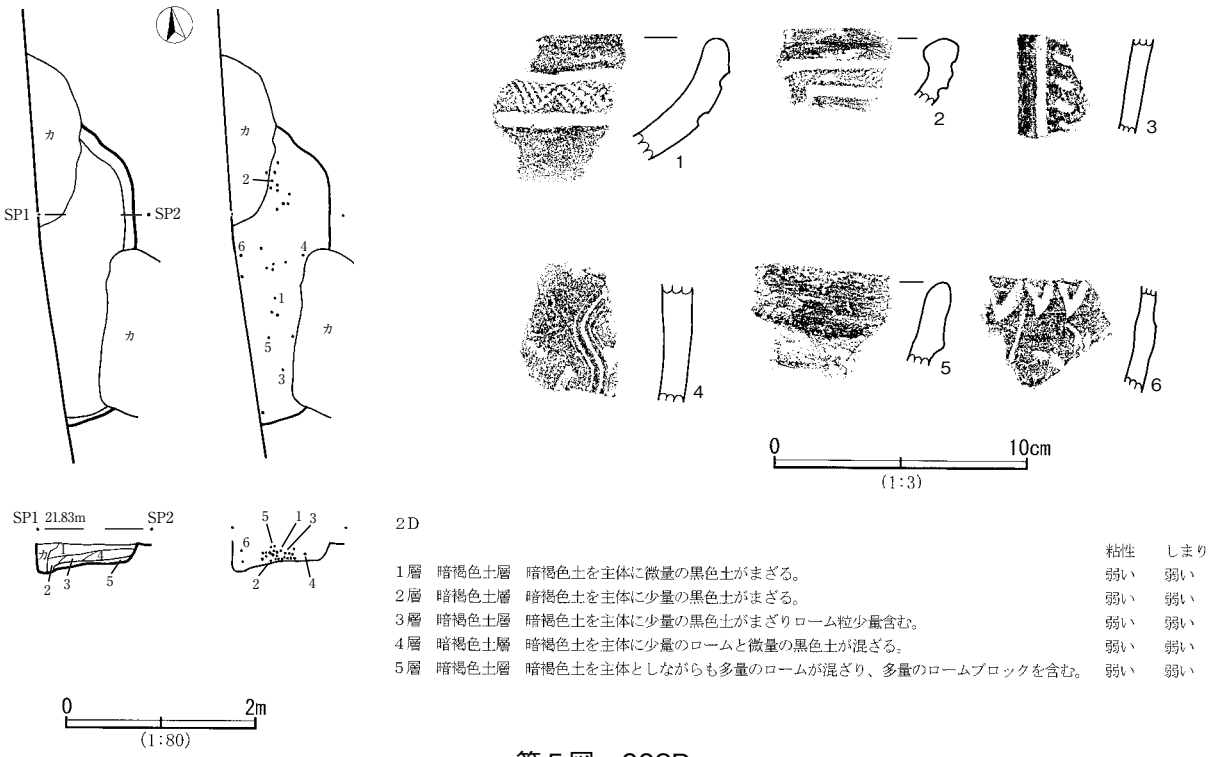
遺　　構　調査区外に遺構が続いているので規模・形態は不明。深さ0.19mの竪穴住居跡である。床は、ロームの床で平坦でしっかりとしている。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは浅いがしっかりとした住居である。

付属施設　柱穴、炉及び周溝等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本５層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　住居全体の覆土中から少破片を中心に少量出土した。

１～４は何れも中期末の縄文土器と考えられる。１は、深鉢口縁片で、平縁で内弯する。口縁下を横走するLR縄文を施した後、上下を太い沈線で区画する。色調は橙褐色で、焼成は普通。２も深鉢口縁片。平縁でやや内弯する。内面には陵を持ち磨かれている。口縁下を横走するLR縄文を施した後、上下を太い沈線で区画する。色調は暗褐色で、焼成は普通。３は、深鉢



2D

		粘性	しまり
1層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に微量の黒色土がまざる。	弱い	弱い
2層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土がまざる。	弱い	弱い
3層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土がまざりローム粒少量含む。	弱い	弱い
4層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる。	弱い	弱い
5層	暗褐色土層　暗褐色土を主体としながらも多量のロームが混ざり、多量のロームブロックを含む。	弱い	弱い

第５図　002D

胴部片で、沈線による区画を行い刺突文を充填する。色調は暗褐色で焼成は良好である。４も深鉢胴部片で、櫛状工具で蛇行しながら垂下する条線を施す。色調は暗褐色で焼成は普通である。

５は、深鉢口縁片で波状を呈する。狭小な口縁部無文帯があり以下を微隆起による区画を行う。内面は磨かれている。色調は暗褐色で、焼成は普通。加曽利Ｅ式と考えられる。６は、深鉢胴部片で、貝殻によるロッキング文を施す。色調は橙褐色で、焼成は普通。前期、浮島式と考えられる。

所　　見　遺構の全様を明らかにできていないが、出土遺物及び出土状況から中期末の竪穴住居跡と判断した。

第２項　土坑

１．002P（第６図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在する。

遺　　構　長軸1.26ｍ×短軸1.19ｍの不整円の土坑で、深さは1.00ｍである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がるが、ややオーバーハングしている部分もあった。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は６層に分層される。４層は焼土層で、厚く面的にも全域に広がっていた。最下層の６層はロームを主体とした層であった。全体として人為的な埋め戻しと考えられる。

遺　　物　縄文土器片を主体として、覆土中層を中心に多く出土した。

１～12まで全て縄文中期、加曽利E式土器である。１～10は深鉢口縁で１～６は焼土層より下層での出土である。１、２は、平縁でやや内弯する。狭小な口縁部無文帯の下端を微隆起による区画を行い、以下、区画内にRL縄文を充填する。内面は磨きを施す。色調は淡褐色で、焼成は普通。胎土に長石、石英を少量含む。３は、波状を呈する深鉢口縁片で、狭小な口縁部無文帯の下端を微隆起による区画を行い、以下、区画内にRL縄文を充填する。内面は丁寧な

磨きを施す。色調は暗褐色で、焼成は良好。４も波状を呈する深鉢口縁片で、RL縄文施文後、口縁下端を磨り消し浅い沈線で口縁部無文帯と区画している。内面は丁寧な磨きを施す。色調は黒褐色で、焼成は良好。５は、平縁で外面に稜を持ちほぼ垂直に立ち上がる。稜の上下に棒状の工具で連続刺突を行い以下、縄文を施す。色調は橙褐色で、焼成は良好。６は、波状を呈する深鉢口縁片で、横走するRL縄文の上下を沈線で区画する。沈線以下に更にRL縄文を施文する。色調は暗褐色で、焼成は良好。

７、８は焼土中からの出土である。７は、波状口縁の波頂部で、RL縄文を施文し、周囲を磨り消している。色調は暗褐色。８は、平縁で、RL縄文を施文し周囲を沈線で区画する。色調は黒褐色である。

９、10は焼土層より上層からの出土である。９は、波状を呈し、口縁下にRL縄文を施文し、口縁部を磨り消し無文帯としている。内面は丁寧に磨かれている。色調は暗褐色で焼成は良好である。10も波状を呈し、やや内弯する。口縁部下端からRL縄文を施文し、磨り消し手法と微隆起による区画を行い狭小な口縁部無文帯を作り出す。内面は丁寧な磨きを施す。色調は暗褐色で、焼成は良好。内面に炭化物が付着している。

11～13も焼土層より下層からの出土である。11は、深鉢の胴部片で、RL縄文を施文し、周囲を磨り消し、沈線と微隆起による区画を行っている。色調は暗褐色である。12は、深鉢底部片で、焼土層より下層からの出土で、底部を下にした状態（正位）で出土した。内外面とも縦方向の丁寧な磨きが行なわれている。色調は黒褐色で、焼成は良好。

また、覆土中から、若干熱を受けている礫も出土している。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。性格については墓坑を想定している。

２．003P（第７図）

検出地区　Ｂ－６Ｇに位置し、調査区南側に所在する。

遺　　構　長軸0.66ｍ×短軸0.59ｍの不整円の土坑で、深さは0.63ｍである。住居跡の柱穴のような形状である。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は５層に分層される。人為的な埋め戻しと考えられる。

遺　　物　覆土中から縄文土器１点が出土した。１は、深鉢胴部片で沈線で区画、原体は器面が磨耗しているため不明。色調は暗褐色である。縄文中期と考えられる。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期の土坑と判断した。

３．004P（第７図）

検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区南側に所在する。

遺　　構　長軸0.82ｍ×短軸0.82ｍの不整円の土坑で、深さは0.35ｍである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は３層に分層される。人為的な埋め戻しと考えられる。

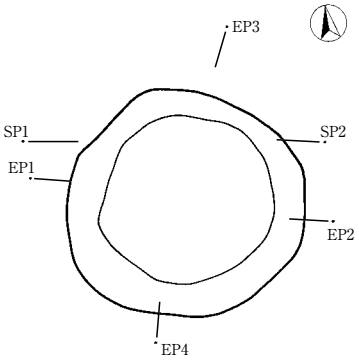
遺　　物　覆土中から縄文土器が、小片を中心に少量出土した。１は、深鉢胴部片で、ＬＲ縄文を充填。内面は磨かれ、色調は橙褐色である。加曽利E式土器と考えられる。

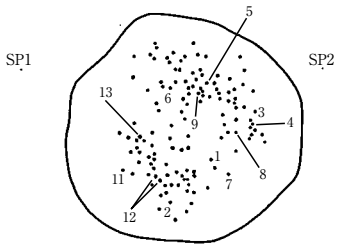
所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

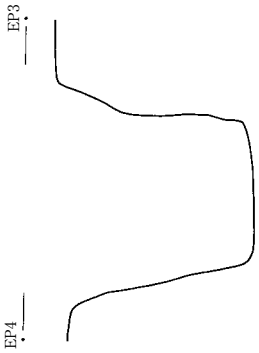
４．005P（第７図）

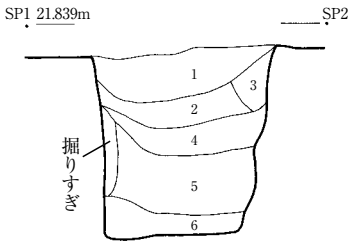
検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区南側に所在する。２M、８P、９P、12Pなどと近接する。

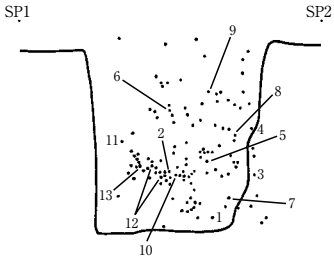
遺　　構　長軸1.04ｍ×短軸1.00ｍの不整円の土坑で、深さは0.94ｍである。坑底はロームの床で、ほ

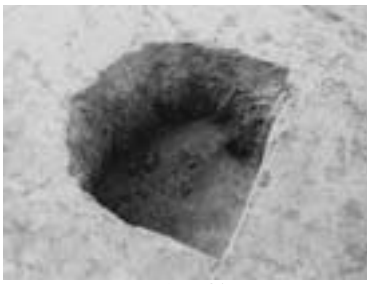




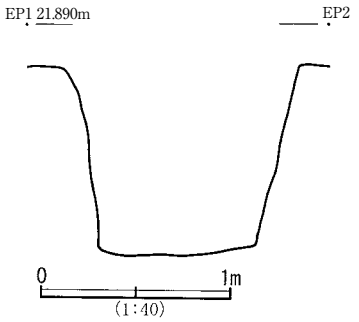






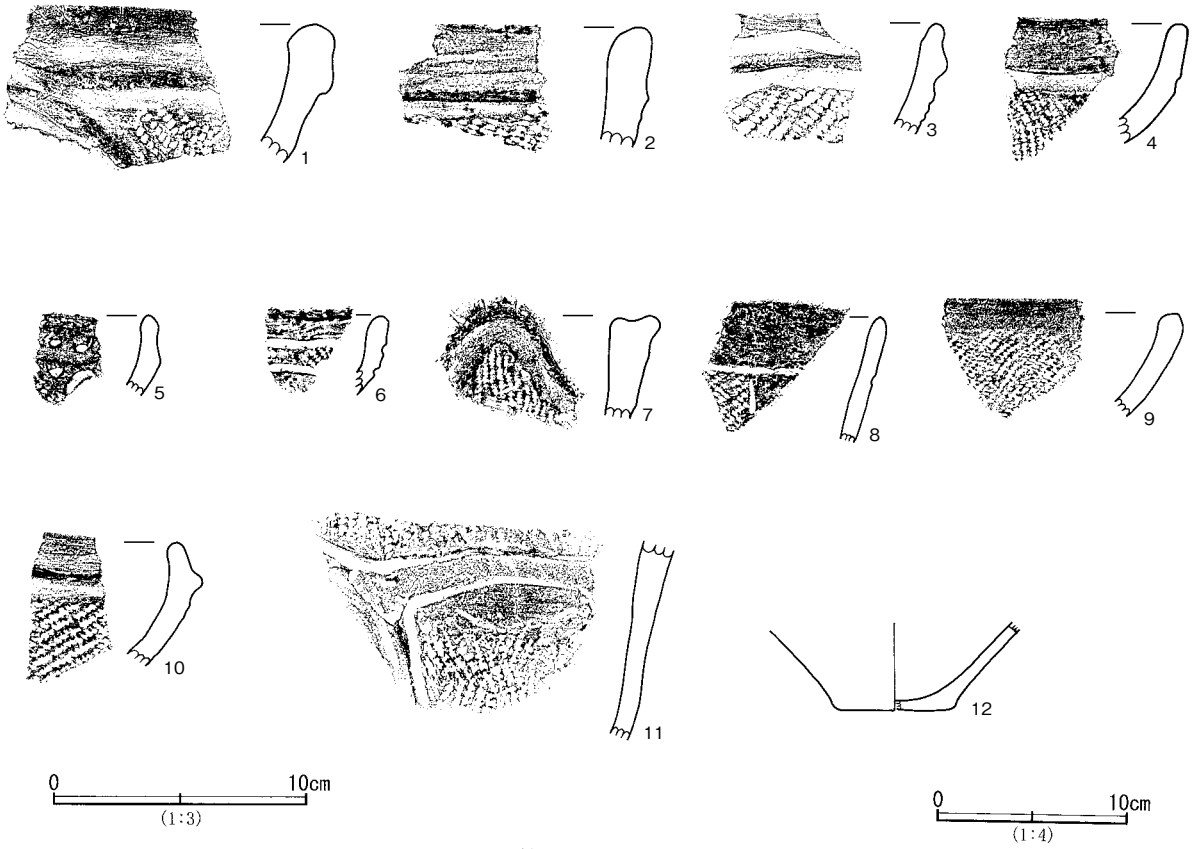


002P　焼土検出状況



2P

			粘性	しまり
1層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが均一に混ざる。	弱い	非常に強い
2層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざり、焼土を微量含む。	弱い	非常に強い
3層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる層。壁の崩壊層。	弱い	非常に強い
4層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざり、少量の焼土も混ざる。	弱い	非常に強い
5層	暗赤褐色土層	暗褐色土を主体にしながらも、多量のロームが粗く混ざる。	非常に弱い	普通
6層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。	弱い	強い



第６図　002P

ぼ平坦。底部に浅い凹状の小穴を１基検出した。壁もロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆　　土　基本は３層に分層される。よくしまった均一な層で厚く堆積している。一気に埋め戻されたものと考えられる。

遺　　物　覆土中層から上層にかけて小片を中心に少量、出土した。１は、深鉢底部で、覆土中層から底部を下にした状態（正位）で出土した。２～４は深鉢胴部片で、２は、ＲＬ縄文。３は、微隆起による区画。４は、無節Ｌ縄文である。５は、深鉢口縁の把手の部分である。何れも加曽利E式土器と考えられる。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

５．006P（第８図）

検出地区　Ｂ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在する。７P、11Pなどと近接する。

遺　　構　長軸1.17m×短軸1.04mの不整円の土坑で、深さは0.57mである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は５層に分層される。よくしまった均一な層が厚く堆積している。人為的な埋め戻しが想定される。

遺　　物　覆土中層から上層にかけて小片を中心に少量出土した。１～３は覆土中からの出土である。１は深鉢口縁片、２は胴部片、３は底部片、網代痕あり。何れも加曽利E式土器と考えられる。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

６．007P（第８図）

検出地区　Ｂ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在する。６P、11Pなどと近接する。

遺　　構　長軸0.74m×短軸0.60mの不整円の土坑で、深さは0.80mである。坑底は、ロームの床でほぼ平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は３層に分層される。

遺　　物　覆土中から少量、出土した。１は、覆土中からの出土で比較的大型の深鉢胴部片、LR縄文を施した後、周囲を磨り消し沈線で区画している。加曽利E式土器である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

７．008P（第８図）

検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区南側に所在する。９P、12P、２Mなどと重複する。

遺　　構　長軸0.94m×短軸0.86mの不整円の土坑で、坑底は、ロームの床でほぼ平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺　　物　覆土中から少量、出土した。１～２は、深鉢胴部片で、縄文時代中期末と考えられる。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期末の土坑と判断した。覆土の観察等から２Mより古い。９P、12Pとの新旧関係は明らかにできなかった。

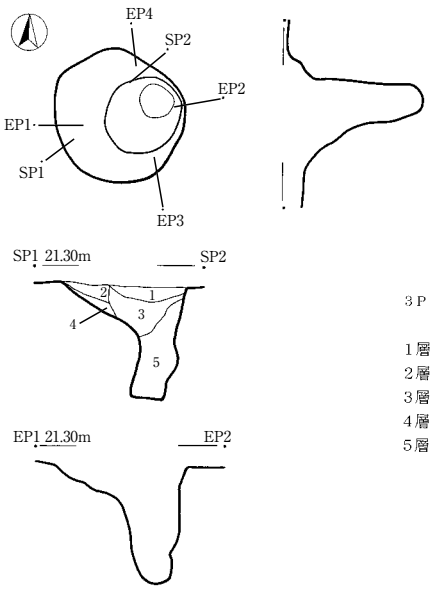
８．009P（第８図）

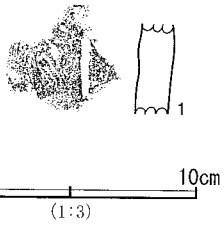
検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区南側に所在する。８P、２Mなどと重複する。

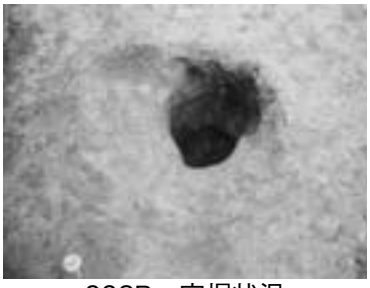
遺　　構　不整円の土坑で、坑底は、ロームの床でほぼ平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺　　物　覆土中から少量、出土した。１は、深鉢口縁片で､LR縄文を沈線で区画する。色調は橙褐色、石英、長石を微量含む。西日本の影響を受けた縄文時代中期末の土器と考えられる。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期末の土坑と判断した。覆土の観察等から２Mより古い。



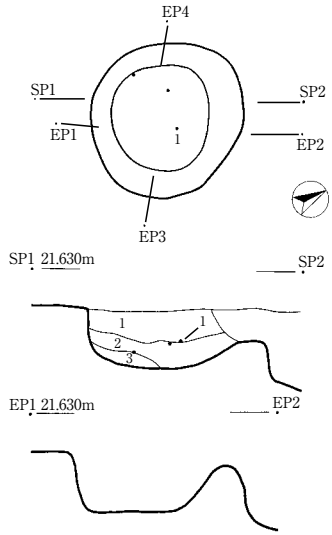


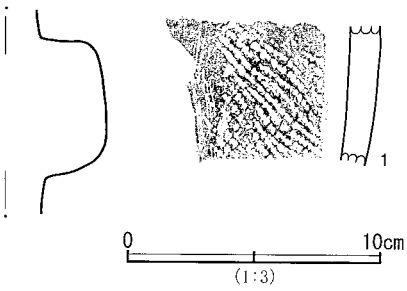


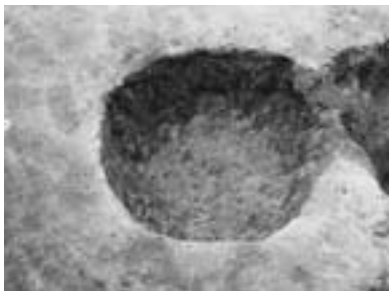
003P　完掘状況

3 P

		粘性	しまり
1層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる。多量のロームが混ざる。	弱い	弱い
2層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる。	弱い	弱い
3層	暗黄褐色土層　ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。	弱い	弱い
4層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に微量のロームが混ざる。ローム粒微量含む。	弱い	弱い
5層	暗黄褐色土層　ロームを主体に微量の暗褐色土が混ざる。ローム粒を多量含む。	非常に弱い	非常に弱い



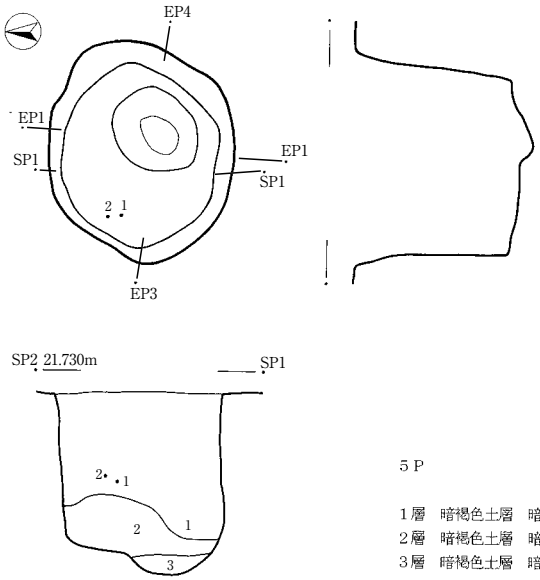


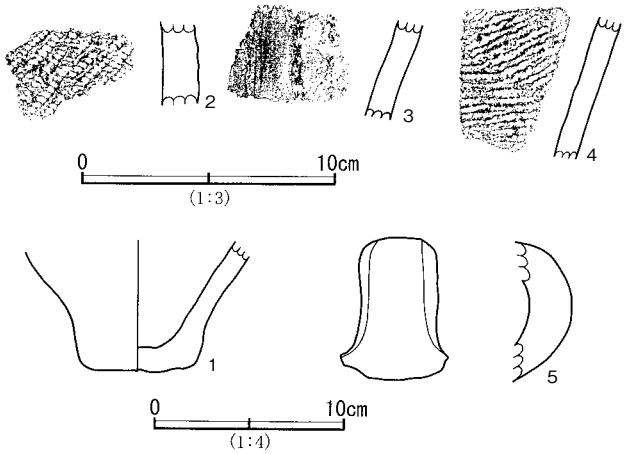


004P　完掘状況

4 P

		粘性	しまり
1層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる層。	弱い	弱い
2層	暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる層。ローム粒少量を含む。	弱い	普通
3層	暗黄褐色土層　暗褐色土を主体としながらも多量のロームが混ざる層。	非常に弱い	非常に弱い





5 P

		粘性	しまり
1層	暗褐色土層　暗褐色土の均一な層に少量のローム粒が全体的に散っている。	弱い	非常に強い
2層	暗褐色土層　暗褐色土に均一な層。	弱い	強い
3層	暗褐色土層　暗褐色土の均一な層に少量のロームが混ざる層。	弱い	強い

第７図　003P・004P・005P

９．012P（第８図）

検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区南側に所在する。６Ｐなどと近接する。

遺　　構　不整円の土坑で、坑底は、ロームの床でほぼ平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺　　物　覆土中から細片が少量、出土した。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期の土坑と判断した。覆土の観察等から２Ｍより古い。８Ｐ、12Pとの新旧関係は明らかにできなかった

10．011P（第９図）

検出地区　Ｂ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在する。６Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸0.63ｍ×短軸0.60ｍの不整円の土坑で、深さは1.15ｍである。住居跡の柱穴のような形状である。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は３層に分層される。

遺　　物　覆土中から少量、出土した。

所　　見　覆土の観察等から縄文時代中期の土坑と判断した。類似の遺構として３Ｐ、14Pなどがある。

11．014P（第９図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在する。１Ｄ、20P、28Pなどと近接する。

遺　　構　長軸0.51ｍ×短軸0.50ｍの不整円の土坑で、深さは0.81ｍである。住居跡の柱穴のような形状である。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は２層に分層される。

遺　　物　覆土中から少量、出土した。

所　　見　覆土の観察等から縄文時代中期の土坑と判断した。類似の遺構として３Ｐ、11Pなどがある。

12．013P（第９図）

検出地区　Ｄ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在する。２Ｐ、23P、25P、30Pなどと近接する。

遺　　構　長軸1.10ｍ×短軸1.09ｍの不整円の土坑で、深さは0.60ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁で、斜めに直線的に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は３層に分層される。よくしまった均一な層が厚く堆積している。一気に埋め戻されたと考えられる。

遺　　物　覆土中層から上層にかけて小片を中心に比較的多量に出土した。１～３は、覆土上層からの出土で、１は深鉢底部～胴部片、２は深鉢口縁片、３は深鉢胴部片。加曽利E式土器である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

13．015P（第10図）

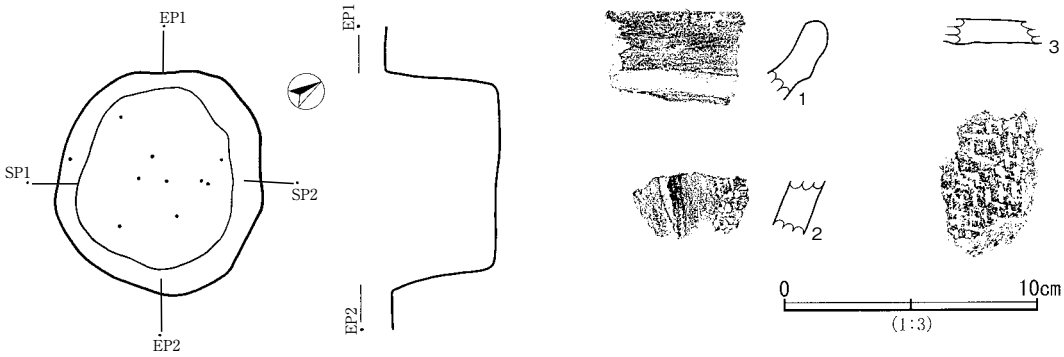
検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在する。１Ｉと重複する。

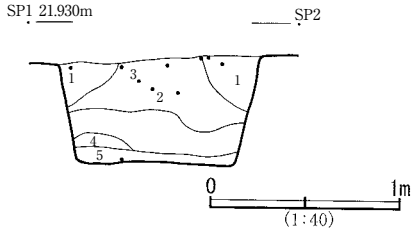
遺　　構　長軸1.13ｍ×短軸1.06ｍの不整楕円の土坑で、深さは0.30ｍである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。小穴等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。

遺　　物　覆土下層から中層にかけて小片を中心に少量、出土した。１～３は、覆土上層からの出土である。１～２は深鉢口縁片、３は、深鉢胴部片、全て加曽利E式土器である。

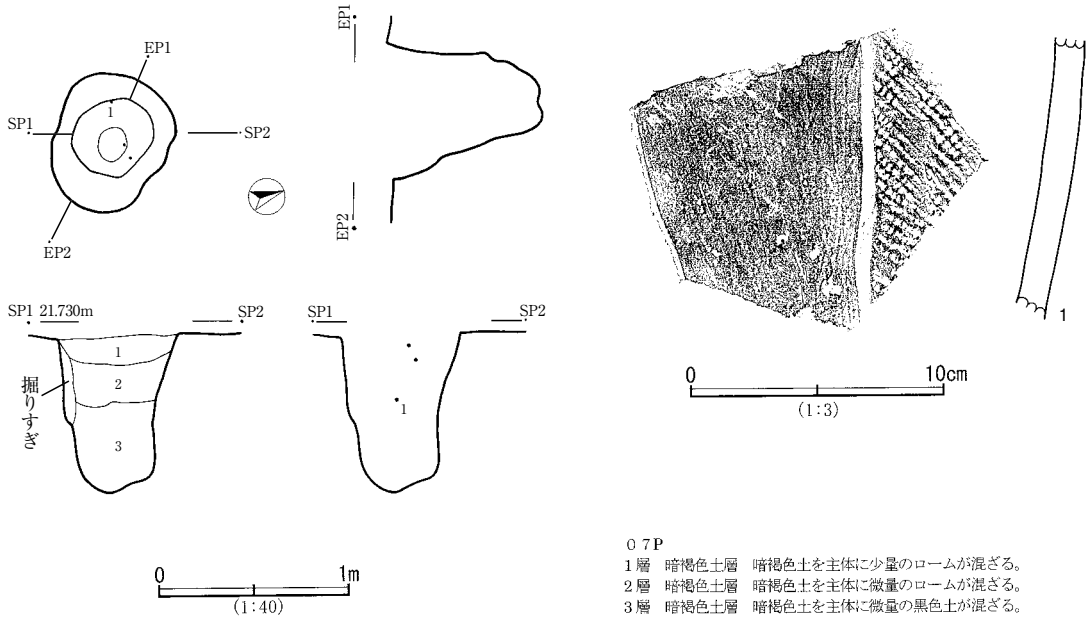
所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。





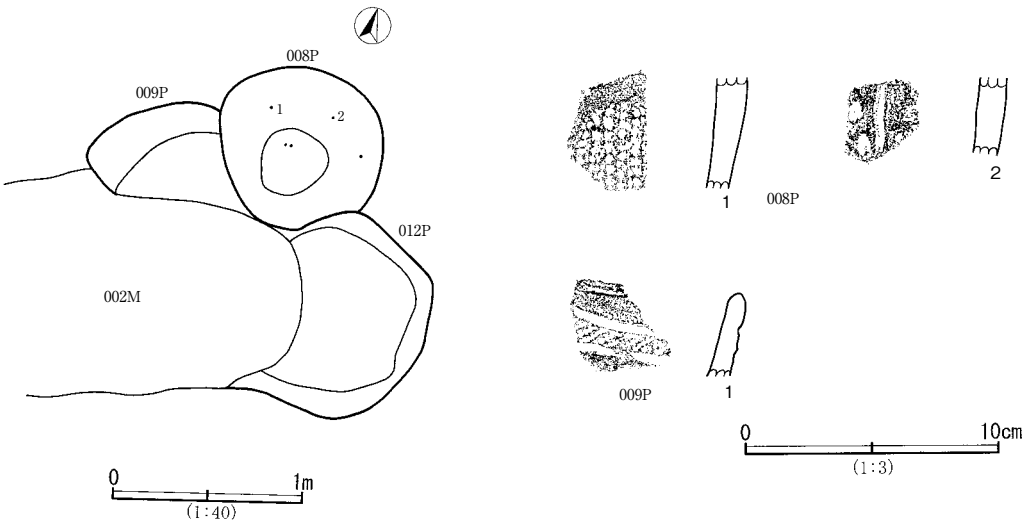
６Ｐ

			粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームがにじむように混ざる。	弱い	非常に強い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に微量のロームがにじむように混ざる。	弱い	非常に強い
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームがにじむように混ざる 直径３ｃｍ程度のロームブロックを多量に含む。	弱い	非常に強い
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと少量の黒色土が混ざる。 直径３ｃｍ程度のロームブロック少量含む。	弱い	非常に強い
５層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームがにじむように混ざる。	弱い	非常に強い

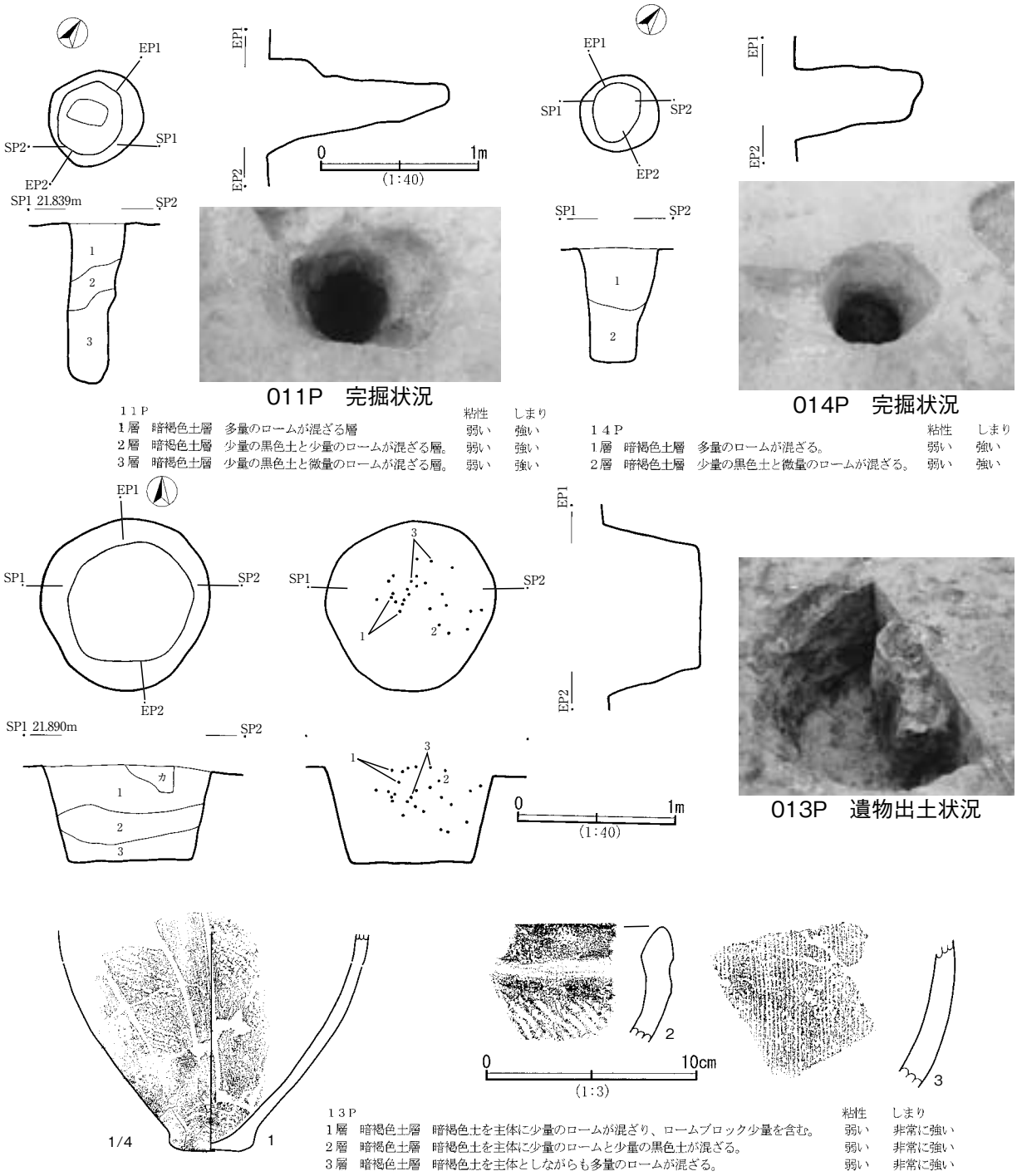


０７Ｐ

１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に微量のロームが混ざる。
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に微量の黒色土が混ざる。



第８図　006P・007P・008P・009P・012P



第９図　011P・013P・014P

14. 016P（第10図）

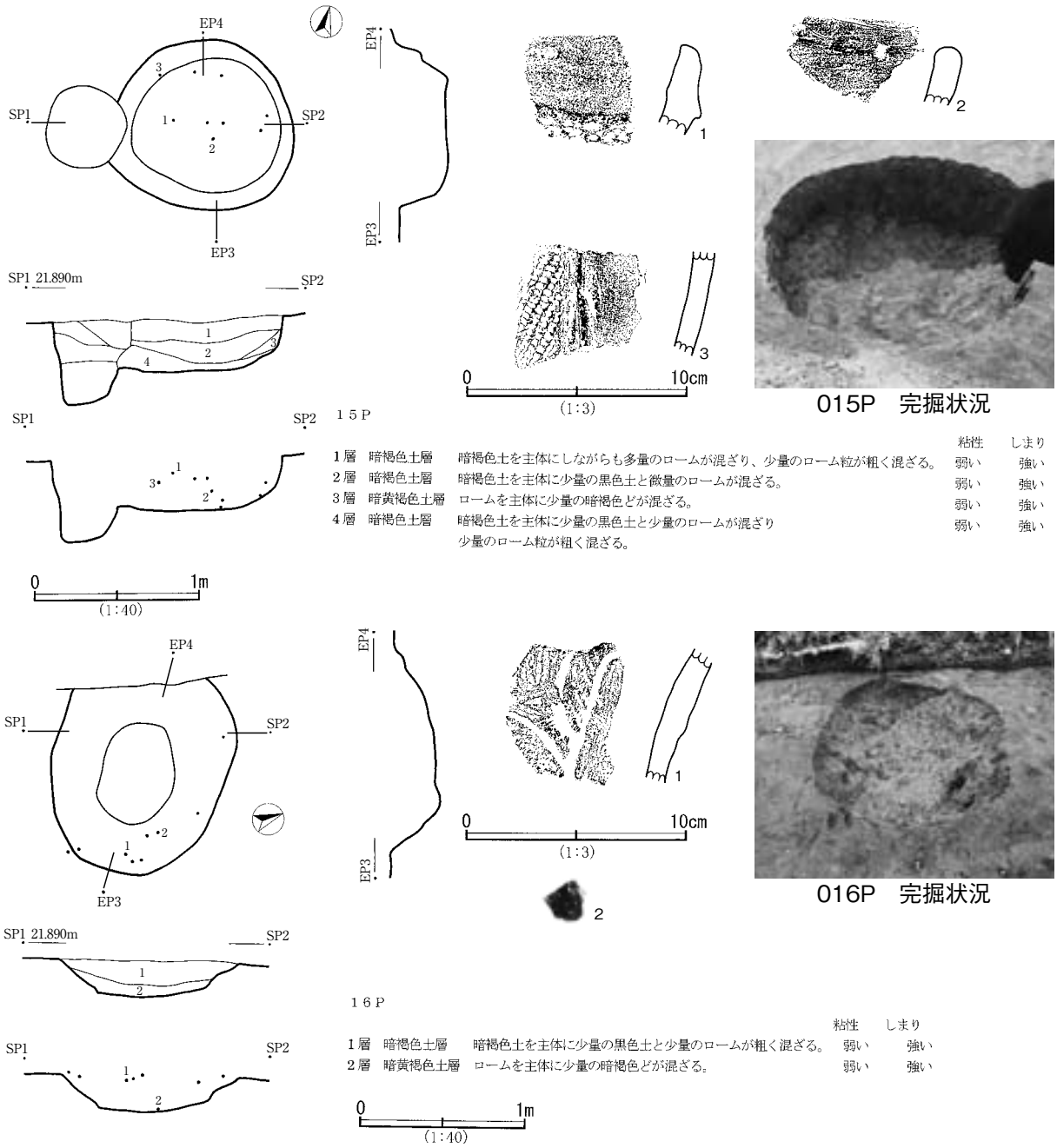
検出地区　Ｃ－２Ｇに位置し、調査区西側に所在し、北側は撹乱を受けている。１Ｉ、29Pなどと近接する。

遺　　構　短軸1.09mの不整楕円の土坑で、深さは0.27mである。坑底はロームの床でほぼ平坦。壁もロームの壁で、斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は２層に分層される。

遺　　物　覆土下層～上層にかけて小片が少量出土した。１は、覆土上層からの出土で、深鉢胴部片、沈線区画を行う。２は黒曜石のフレイクである。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期末の土坑と判断した。



第10図　015P・016P

15. 017P（第11図・12図）

検出地区　C－４Gに位置し、調査区中央に所在し、18Pと重複する。26P、31Pなどと近接する。

遺　　構　長軸1.41m×短軸1.13mの不整楕円の土坑で、深さは0.29mである。坑底はロームの床でほぼ平坦。壁もロームの壁で、斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は３層に分層される。

遺　　物　覆土中から大型破片を中心に比較的大量に出土した。１～４は、深鉢口縁片、微隆起による区画を行う。５は口縁の把手。７～９は胴部片、沈線による区画を行う。６は底部片。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。覆土の観察等から18Pより古い土坑と判断した。

16. 018P（第11図・12図）

検出地区　C－４Gに位置し、調査区中央に所在し、18Pと重複する。28P、29Pなどと近接する。

遺　　構　長軸1.20m×短軸0.90mの不整楕円の土坑で、深さは0.23mである。坑底はロームの床でほぼ平坦。壁もロームの壁で、斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は２層に分層される。自然堆積と考えられる。

遺　　物　覆土中から比較的大量に出土した。１～３、５は深鉢口縁片、４は胴部片である。５は、色調が白色で緻密な胎土であり、西日本の影響を受けた土器と考えられる。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期末の土坑と判断した。覆土の観察等から18Ｐより新しい土坑と判断した。

17. 020Ｐ（第12図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、31Pと重複する。28Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.19m×短軸0.97mの不整円の土坑で、深さは0.33mである。坑底はロームの床でほぼ平坦。壁もロームの壁で、斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。人為的な堆積と考えられる。

遺　　物　覆土中から大型破片が比較的大量に出土した。１は波状口縁の深鉢、逆Ｕ字の文様構成を採る。２～３は深鉢口縁、全て加曽利Ｅ式土器である。４は石皿の破片である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。31Ｐとの新旧関係は、明らかにし得なかった。

18. 021Ｐ（第13図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在し、15Ｐ、27Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.27m×短軸1.23mの不整円の土坑で、深さは0.57mである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。全体にロームブロックを多く含み、人為的な堆積と考えられる。

遺　　物　覆土中から比較的大量に出土した。１～３は深鉢口縁である。３は、白色で胎土が緻密。西日本の影響を受けた土器と考えられる。４は胴部片である。５は土製品か。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期末の土坑と判断した。

19. 022Ｐ（第13図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、27Ｐ、31Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.15m×短軸1.04mの不整楕円の土坑で、深さは0.99mである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁で漏斗状に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は５層に分層される。人為的な堆積と考えられる。

遺　　物　遺物は出土しなかった。

所　　見　遺構の形態、覆土の観察等から縄文時代の土坑と判断した。用途は、陥穴を想定している。

20. 023Ｐ（第14図）

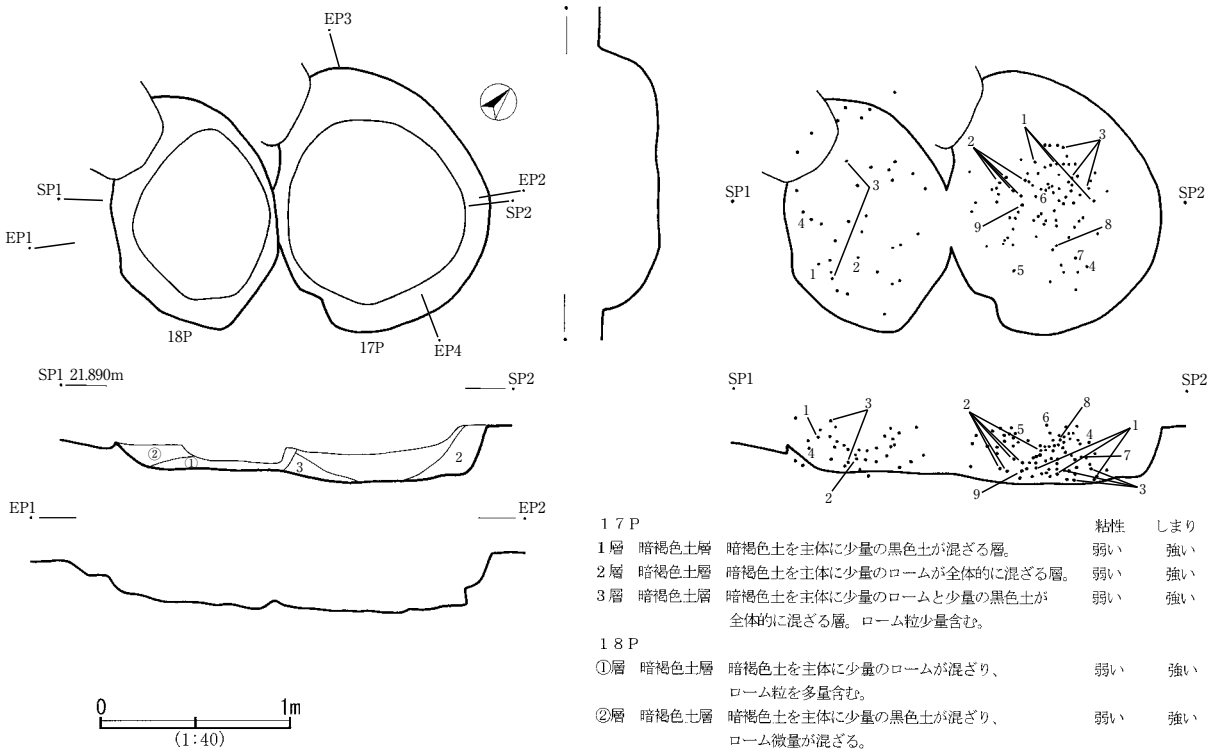
検出地区　Ｄ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在し、13Ｐ、25Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸0.95m×短軸0.90mの不整円の土坑で、深さは0.72mである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。人為的な堆積と考えられる。

遺　　物　覆土中層から集中的に出土した。４は深鉢底部片で、土坑中央、覆土中層に据え置かれ、土圧で潰れた状態で出土した。１は口縁片で、沈線による区画を行っている。２～５は胴部片で、沈線区画のものと条線系のものである。全て加曽利Ｅ式土器である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

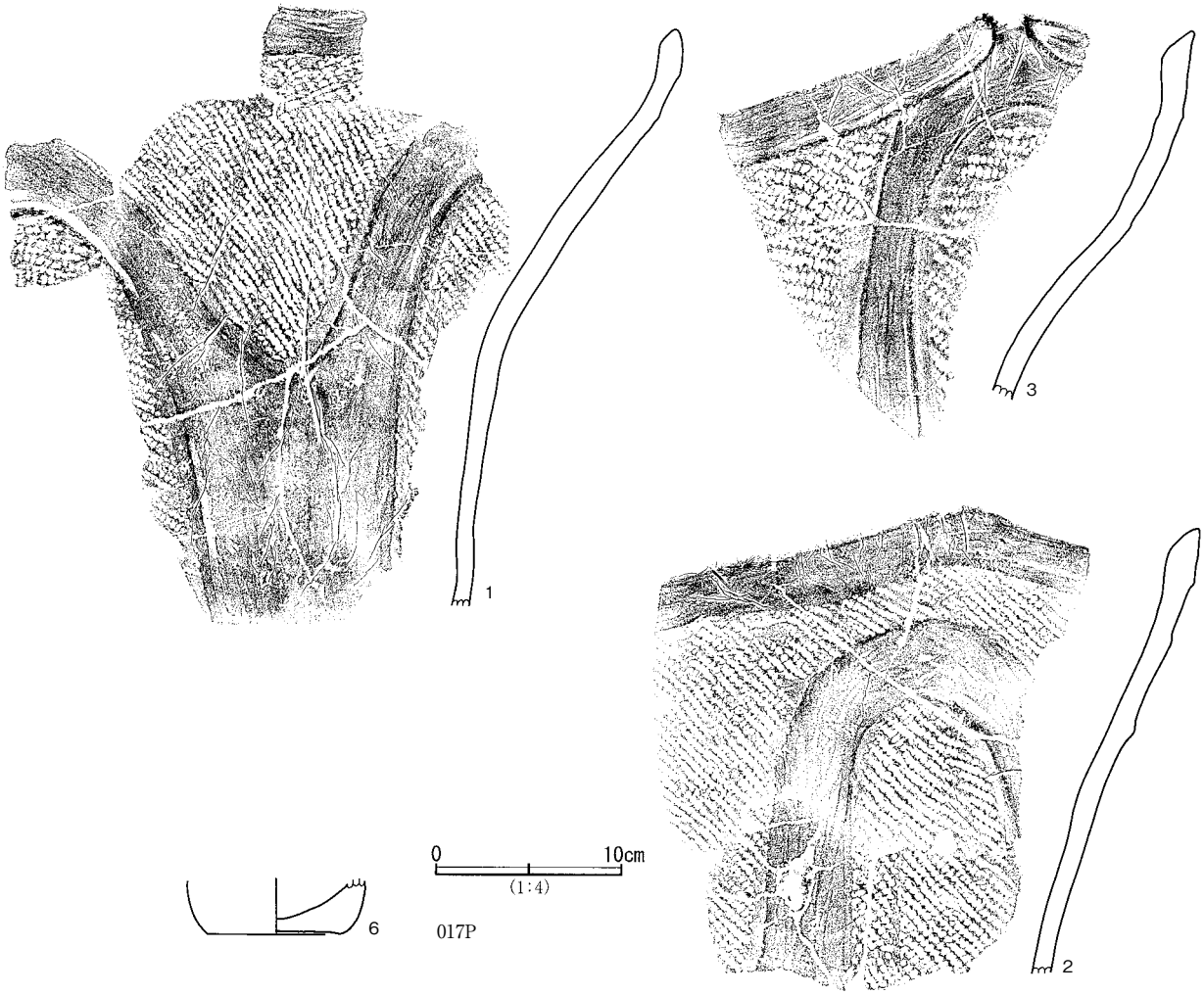


１７Ｐ

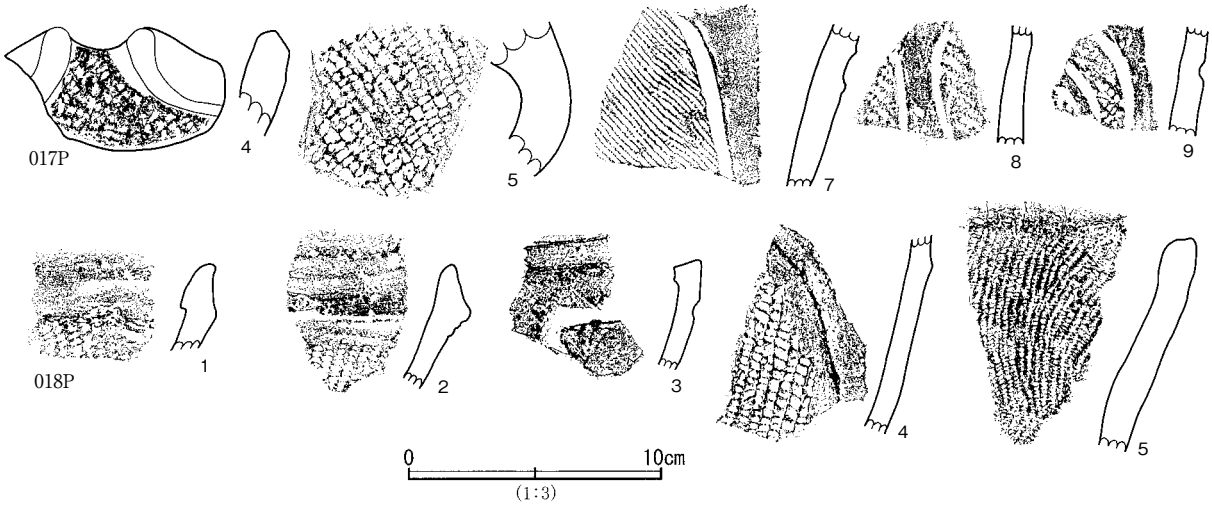
			粘性	しまり
1層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる層。	弱い	強い
2層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが全体的に混ざる層。	弱い	強い
3層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと少量の黒色土が全体的に混ざる層。ローム粒少量含む。	弱い	強い

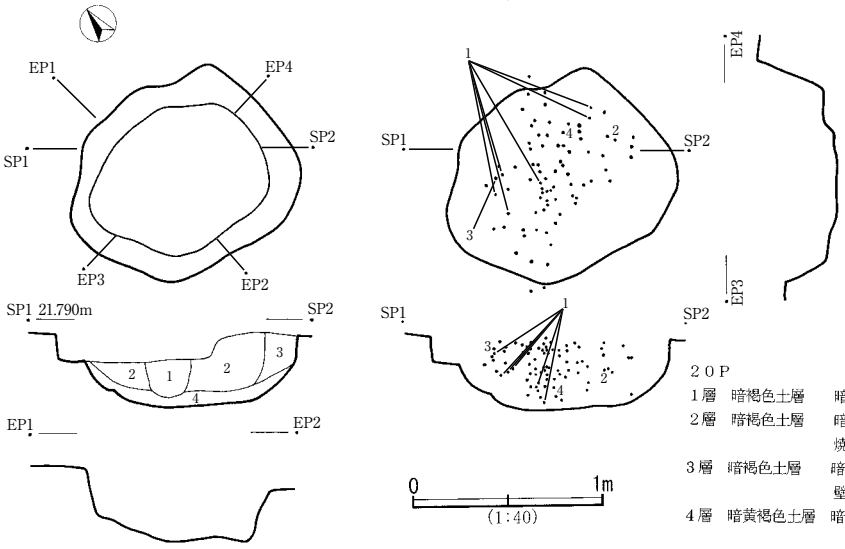
１８Ｐ

①層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざり、ローム粒を多量含む。	弱い	強い
②層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざり、ローム微量が混ざる。	弱い	強い



第11図　017P・018P

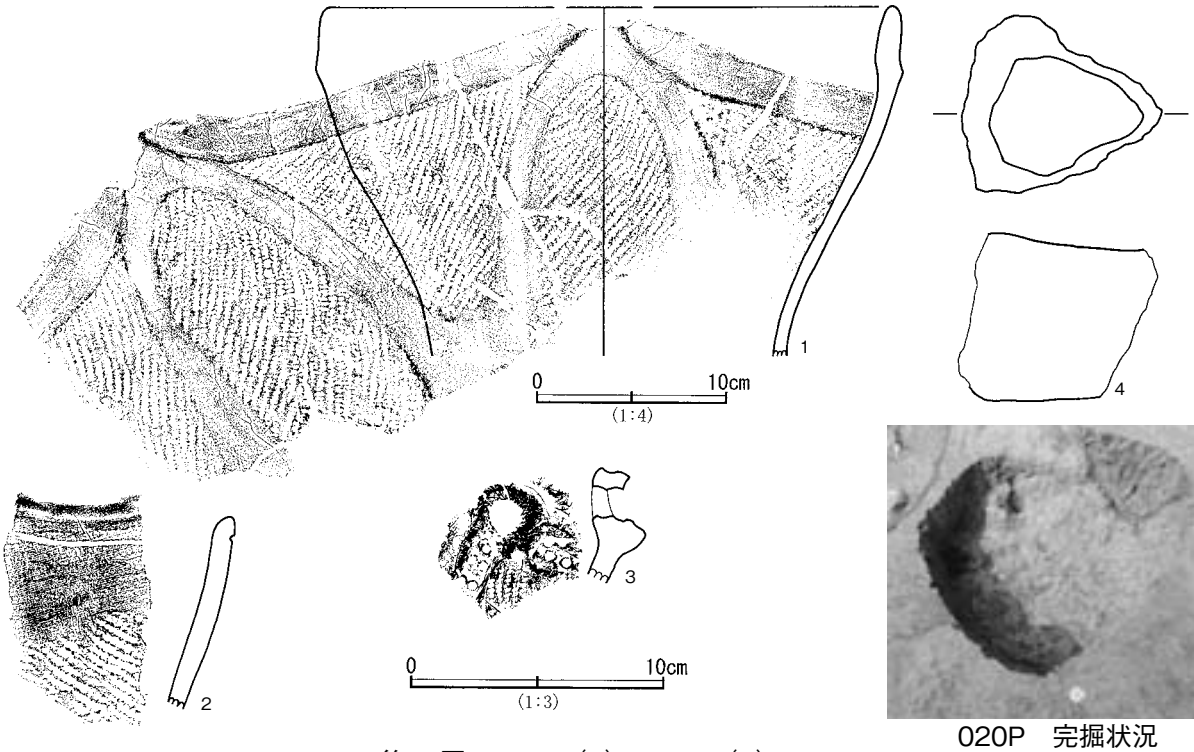




020P　遺物出土状況

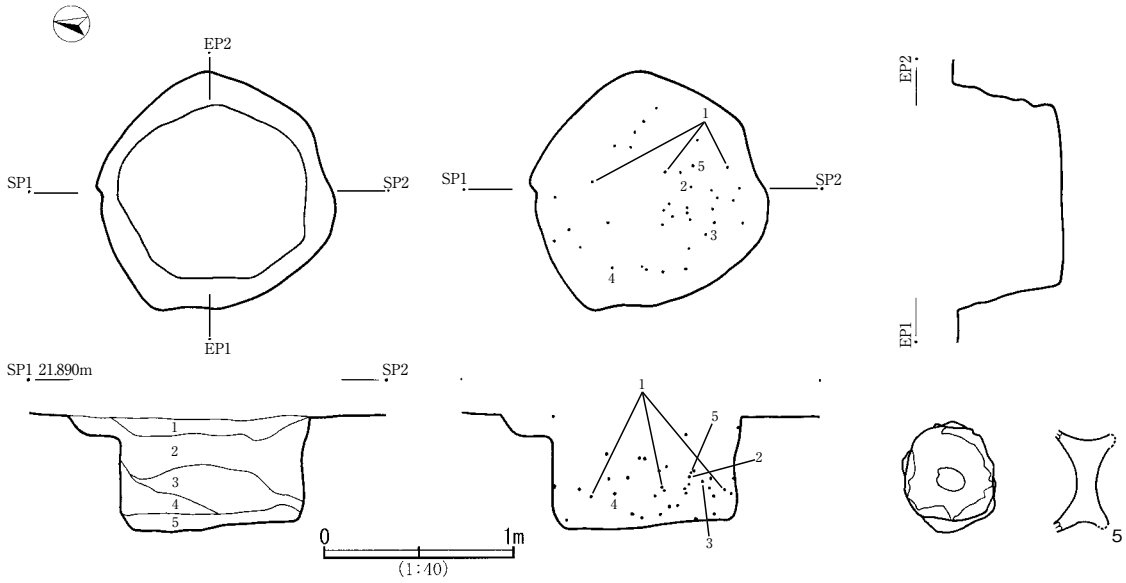
２０Ｐ

１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざり、焼土少量を含む。
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に微量の黒色土と微量のロームが混ざる。焼土少量含む。
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。壁崩壊層のセクション。
４層	暗黄褐色土層	暗褐色土を主体としながらも多量のロームが混ざる。



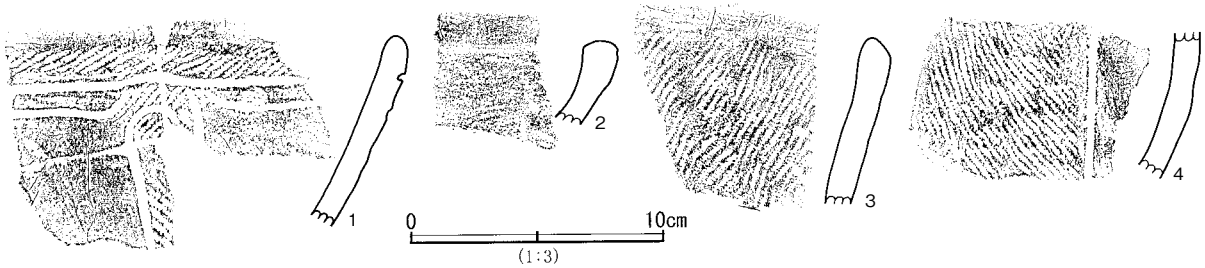
020P　完掘状況

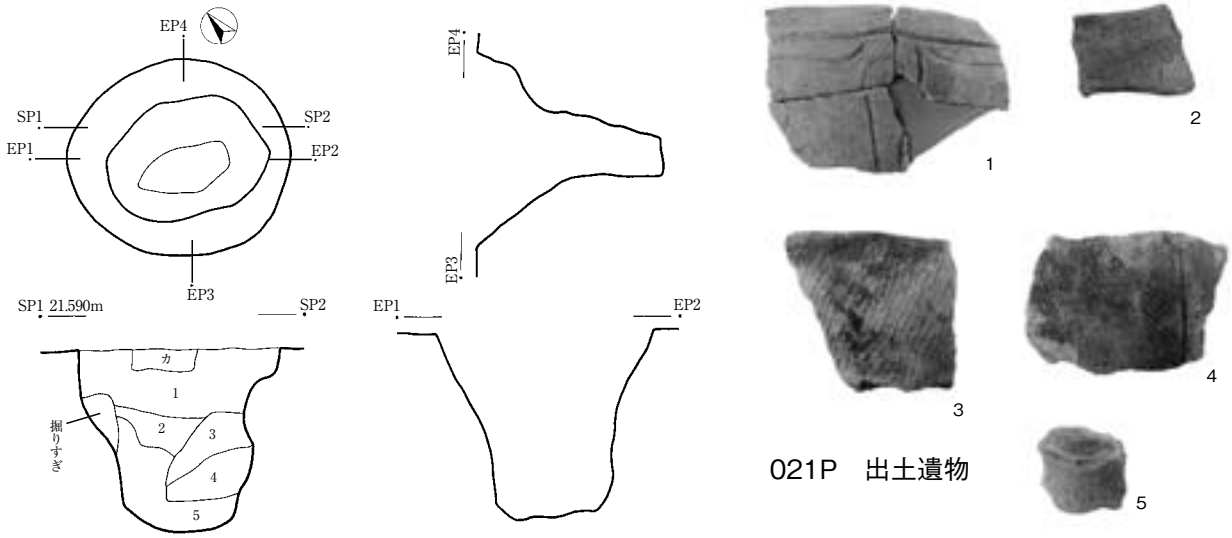
第12図　017P（2）・018P（2）・020P



２１Ｐ

			粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる層。	弱い	非常に強い
２層	暗黄褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる層。直径５ｃｍ程度のロームブロック少量を含む。	弱い	非常に強い
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる層。ローム微量が混ざり、直径５ｃｍ程度のロームブロック少量を含む。	弱い	強い
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと少量の黒色土が混ざる。直径５ｃｍ程度のロームブロック少量を含む。	弱い	強い
５層	暗褐色土層	暗褐色土の緻密な層で、少量のロームが混ざる。	弱い	非常に強い

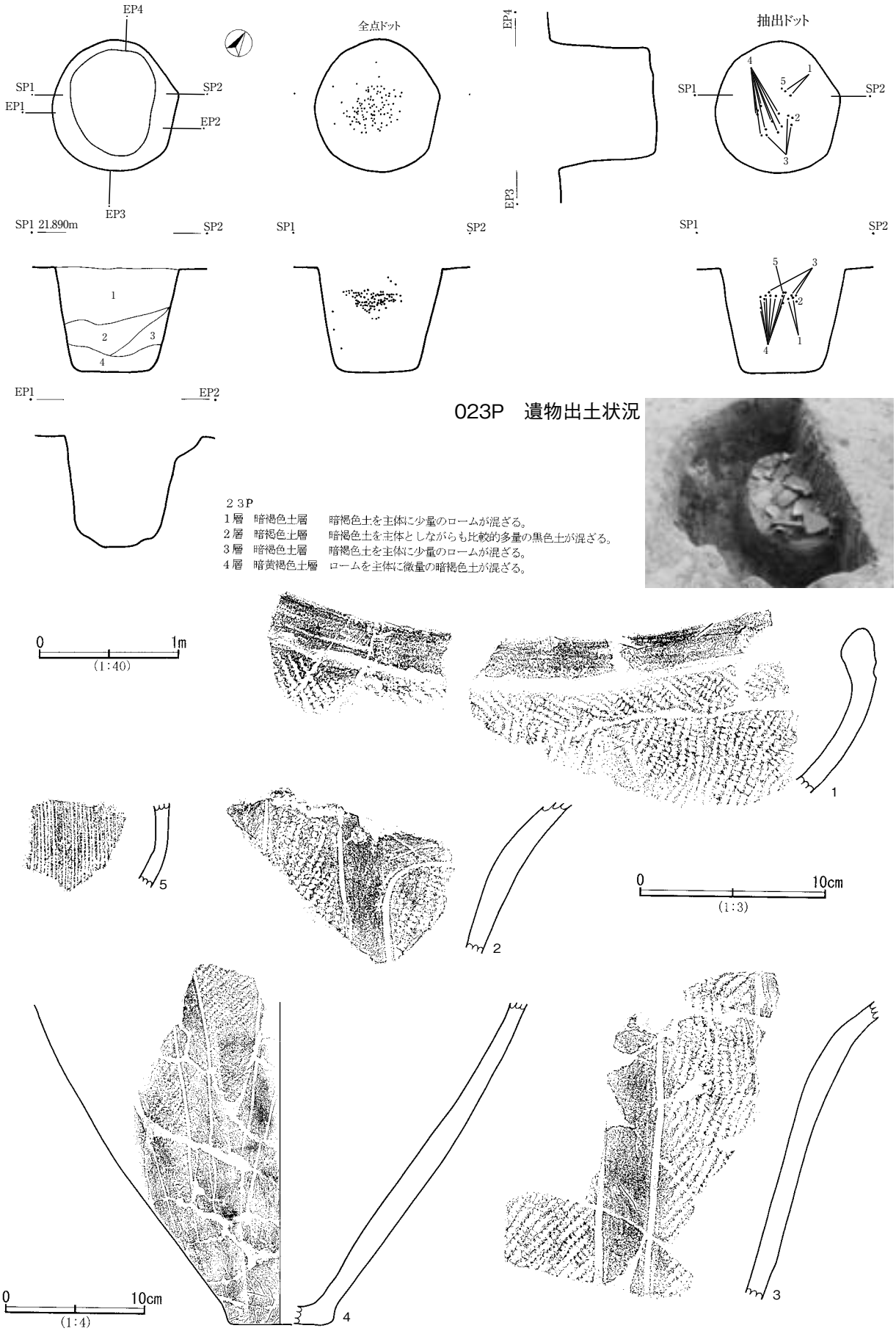




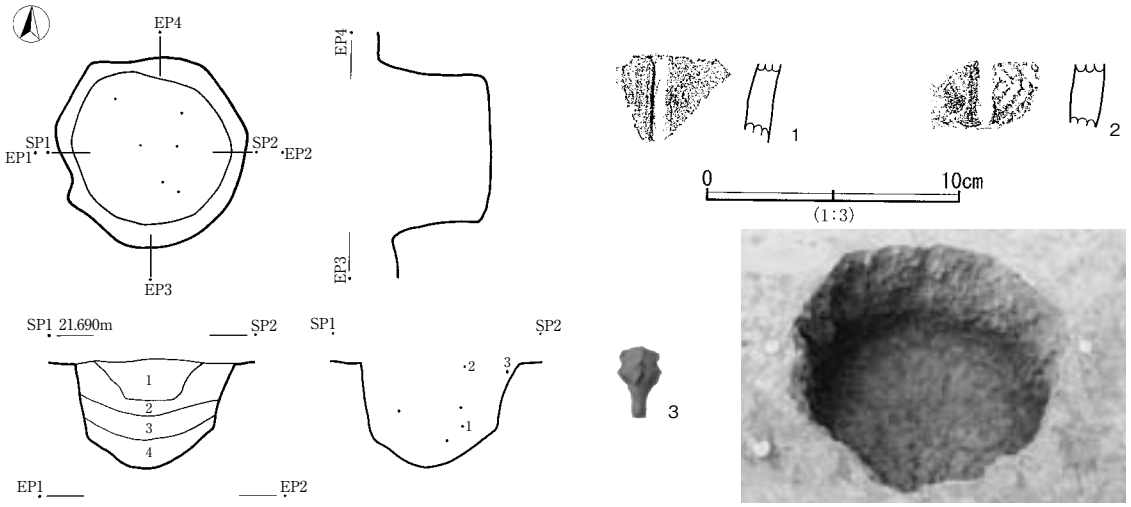
２２Ｐ

			粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが均一に混ざる層。	弱い	非常に強い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる層。	弱い	非常に強い
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざる層。ローム粒少量含む。	弱い	非常に強い
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる層。ローム粒少量含む。	弱い	非常に強い
５層	暗黄褐色土層	ロームを主体として、少量の暗褐色土が混ざる層。	弱い	非常に強い

第13図　021P・022P


EP4
SP1
SP2
EP1
EP2
EP3
全点ドット
抽出ドット
SP1 21.890m
023P　遺物出土状況
２３P
１層　暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。
２層　暗褐色土層　暗褐色土を主体としながらも比較的多量の黒色土が混ざる。
３層　暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。
４層　暗黄褐色土層　ロームを主体に微量の暗褐色土が混ざる。
0　1m
(1:40)
0　10cm
(1:3)
0　10cm
(1:4)

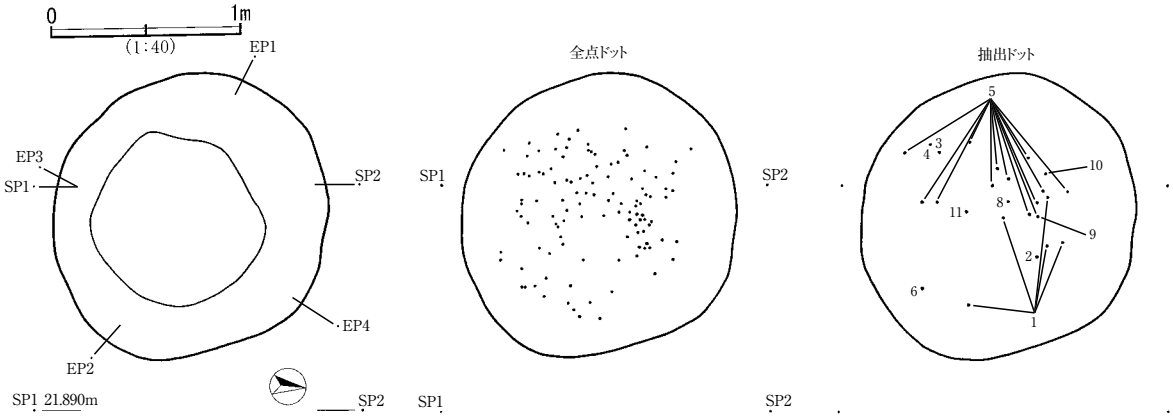
第14図　023P

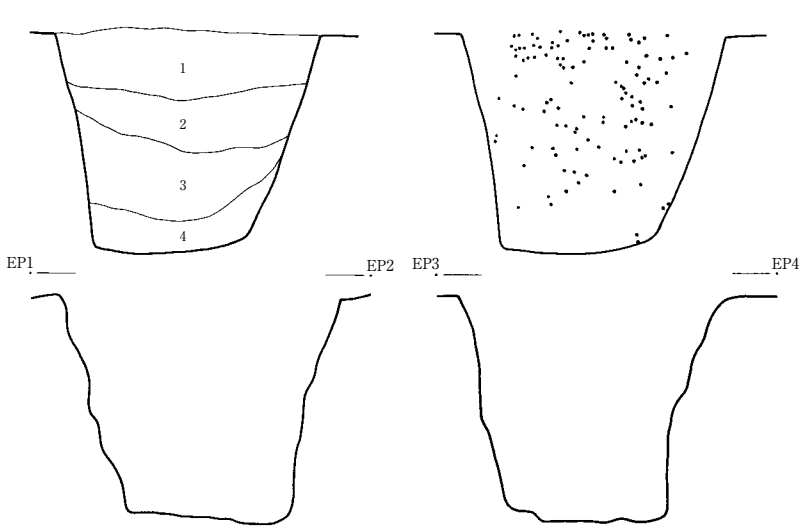


025P　完掘状況

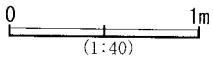
２５Ｐ

			粘性	しまり
１層	暗黄褐色土層	暗褐色土を主体にしながらも、多量のロームが粗く混ざる。	弱い	弱い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体として少量のロームが混ざる。	弱い	普通
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体として少量の黒色土と微量のロームが混ざる。	弱い	強い
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体として少量のロームと微量の黒色土が均一に混ざる。	普通	強い





026P　完掘状況



２６Ｐ

			粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと微量の黒色土が混ざる。焼土粒子少量を含む。	弱い	強い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる。焼土粒子とローム粒子を各少量含	弱い	強い
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと混ざる。焼土粒子を微量含む。	弱い	強い
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざる。多量のロームブロックを含む。	弱い	強い

第15図　025P・026P

21. 025Ｐ（第15図）

検出地区　Ｄ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在し、13Ｐ、23Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.02ｍ×短軸1.00ｍの不整円の土坑で、深さは0.55ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。

遺　　物　覆土中から少量出土した。１～２は、深鉢胴部片。沈線区画を行う。３は、石錐か。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

22. 026Ｐ（第15図・16図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在し、17Ｐ、27Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.54ｍ×短軸1.47ｍの不整円の土坑で、深さは1.17ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は４層に分層される。人為的な埋め戻しと考えられる。

遺　　物　覆土中層～上層にかけて多量に出土した。１～４は深鉢口縁片で、沈線区画を行う。３は、西日本の影響を受けた中期末の土器と考えられる。５は胴部片、微隆起による区画を行う。６は深鉢口縁片で、阿玉台Ⅱ式。７も深鉢口縁片で、縄文時代後期か。

所　　見　出土遺物に若干のばらつきがあるが、概ね縄文時代中期後半の土坑と判断した。

23. 027Ｐ（第16図・17図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在し、21Ｐ、26Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.33ｍ×短軸1.33ｍの不整円の土坑で、深さは0.74ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　基本は６層に分層される。人為的な埋め戻しと考えられる。

遺　　物　覆土中層～上層にかけて比較的多量に出土した。１は波状口縁でくびれの弱い小型の深鉢。ＬＲ縄文帯と磨り消しによる無文帯とを微隆起で区画する。内面は磨かれている。中期末の土器と考えられる。２～４は口縁片。２は波状を呈し、微隆起による区画有り。３も波状を呈し、口縁に添って円形の連続刺突が２列めぐる。４も波状口縁の波頂部で把手が取り付いていたと思われる。ＬＲ縄文を施文する。３、４も中期末の土器と考えられる。５～７は胴部片。８は口縁片で称名寺式と考えられる。また、小型の磨製石斧、黒曜石のフレイクが出土している。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期末の土坑と判断した。遺構の規模、形態、装飾性の高い小形磨製石斧が出土していること、人為的な堆積状況を示すことなどから、墓坑の可能性が高い。

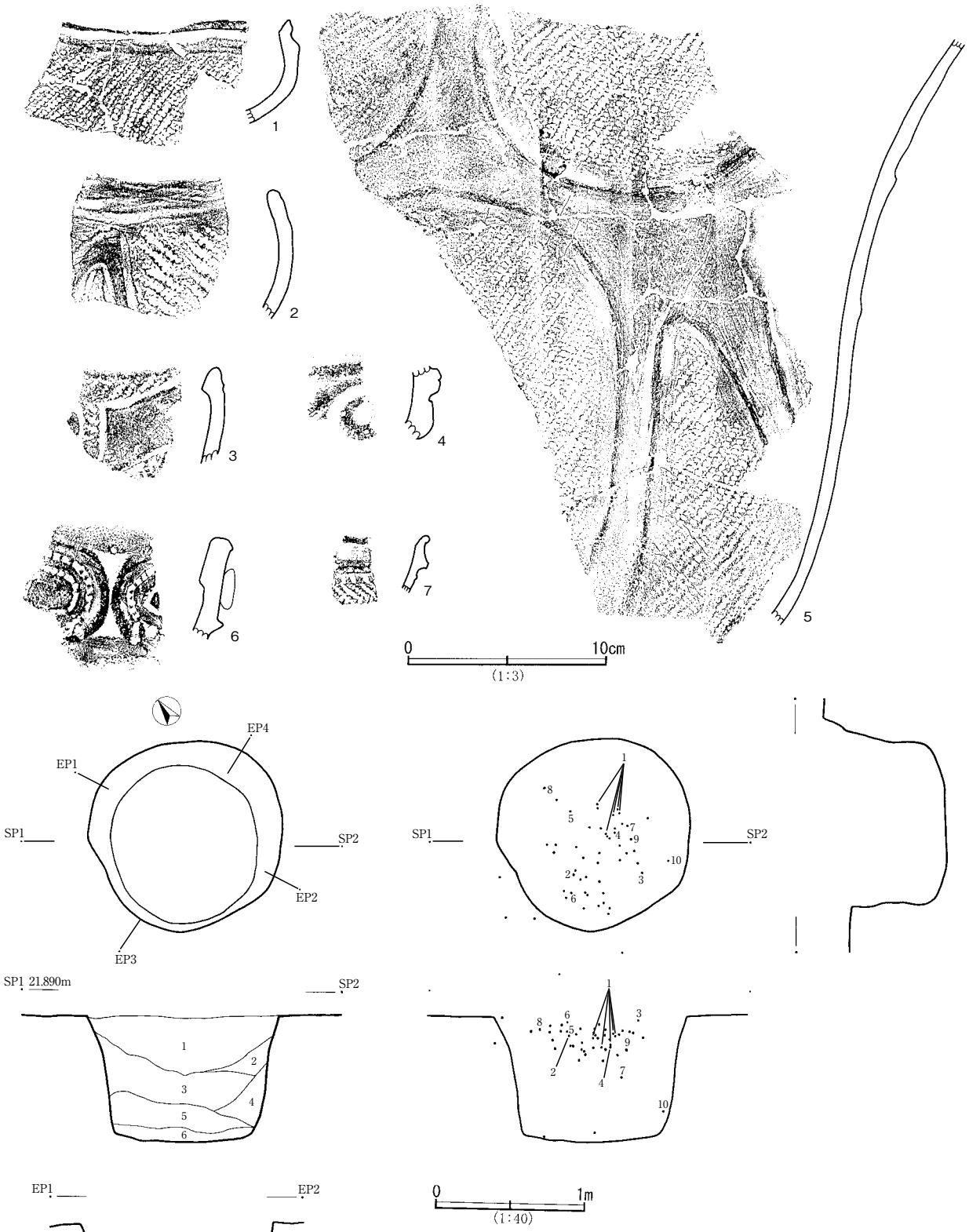
24. 028Ｐ（第17図・18図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、18Ｐ、20Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.34ｍ×短軸1.18ｍの不整楕円の土坑で、深さは1.14ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。一部オーバーハングしている部分もある。隣接して小穴を検出しているが別遺構の可能性が高いと思われる。

覆　　土　基本は11層に分層される。人為的な埋め戻しと考えられる。

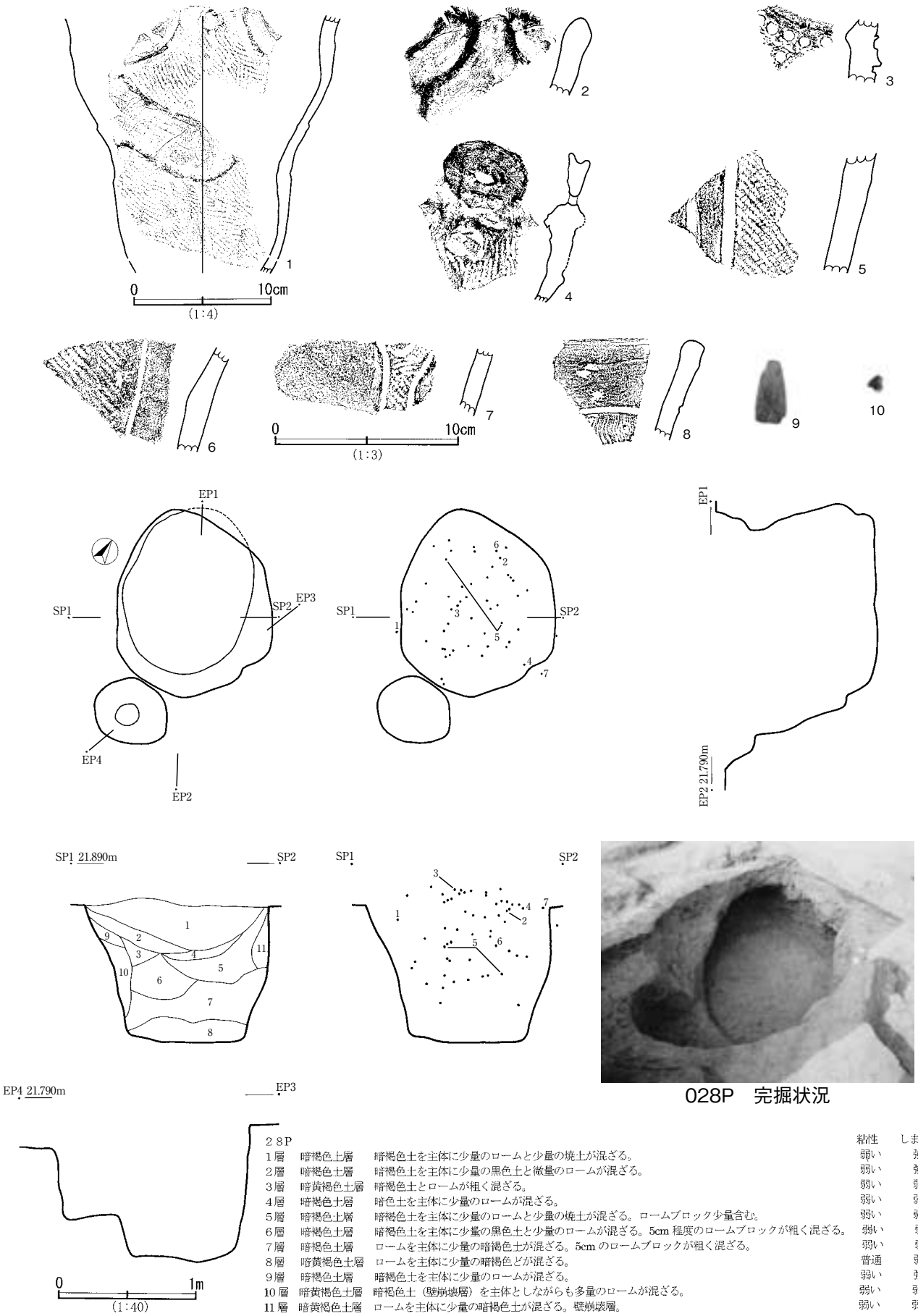
遺　　物　覆土中層～上層にかけて比較的多量に出土した。１は深鉢口縁。波状を呈し、やや内弯し内面に稜を持つ。ＬＲ縄文を施し周囲を磨り消し沈線で区画する。色調は、外面が暗褐色で内面が橙褐色である。西日本の影響を受けた中期末の土器と考えられる。２～６は加曽利Ｅ式土器である。何れも微隆起による区画を行っている。２は、深鉢口縁片で波状を呈する。口縁部下端からＬＲ縄文を充填する。内面は丁寧に磨かれている。色調は暗褐色で、焼成は良好である。



２７Ｐ

			粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざり、ごく微量のローム、焼土、炭化物を含む。	弱い	強い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。	普通	強い
３層	暗黄褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。 直径 3cm 程度のロームブロックを多量に含む。	普通	強い
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざり、直径１cm程度のローム粒少量を含む。	普通	強い
５層	黒褐色土層	黒色土を主体に少量のロームと少量の暗褐色ピが混ざる。	普通	強い
６層	暗褐色土層	暗褐色土の均一な層で、微量のロームが混ざる。	普通	非常に強い

第16図　026P・027P

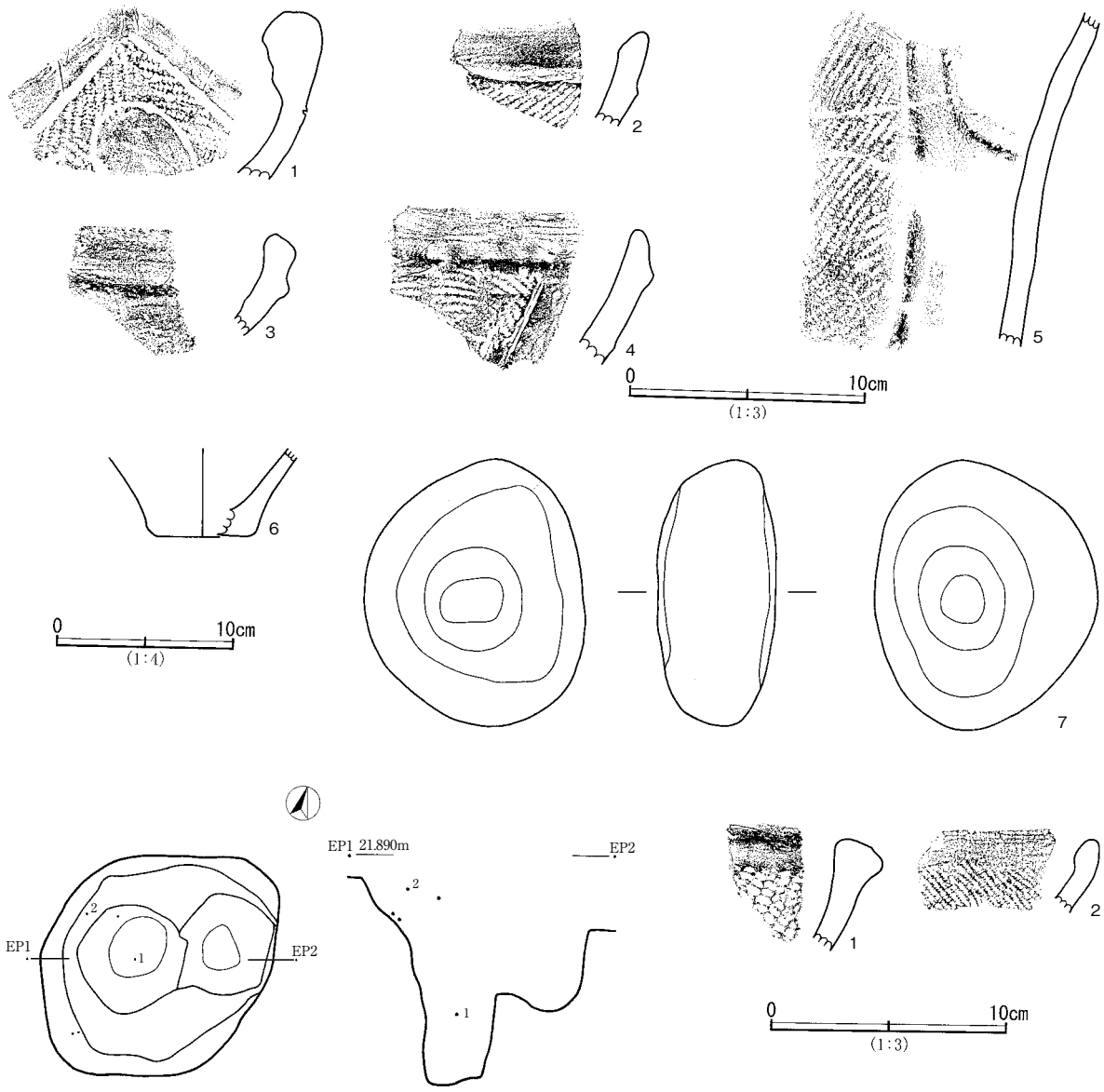


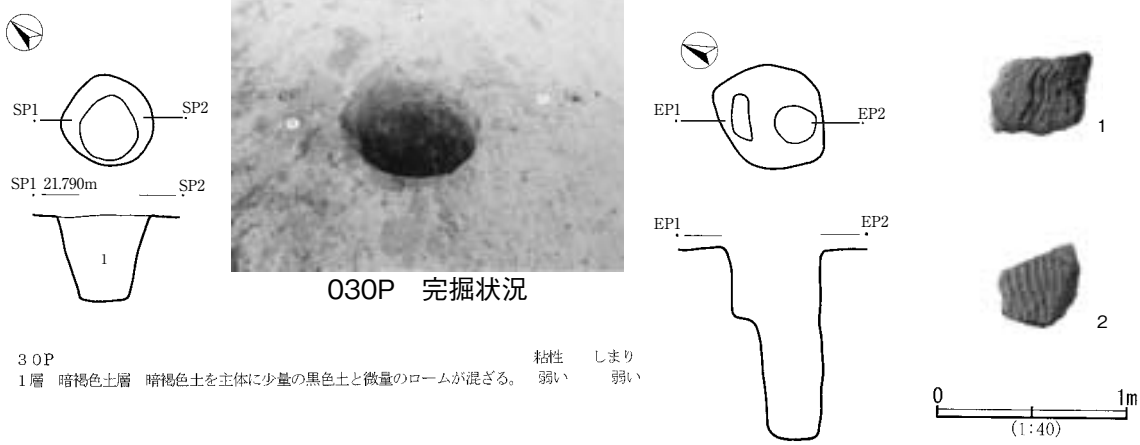
028P　完掘状況

２８P

			粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと少量の焼土が混ざる。	弱い	強い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる。	弱い	強い
３層	暗黄褐色土層	暗褐色土とロームが粗く混ざる。	弱い	弱い
４層	暗褐色土層	暗色土を主体に少量のロームが混ざる。	弱い	弱い
５層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームと少量の焼土が混ざる。ロームブロック少量含む。	弱い	弱い
６層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざる。5cm 程度のロームブロックが粗く混ざる。	弱い	弱い
７層	暗褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。5cm のロームブロックが粗く混ざる。	弱い	弱い
８層	暗黄褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色どが混ざる。	普通	弱い
９層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが混ざる。	弱い	強い
10 層	暗黄褐色土層	暗褐色土（壁崩壊層）を主体としながらも多量のロームが混ざる。	弱い	弱い
11 層	暗黄褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。壁崩壊層。	弱い	弱い

第17図　027P（2）・028P





３０P
１層　暗褐色土層　暗褐色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる。　粘性　弱い　しまり　弱い

第18図　028P（2）・029P・030P・032P

３も深鉢口縁片で、口縁以下無文帯となっている。色調は暗褐色である。４も深鉢口縁片で、平縁でやや内弯する。狭小な口縁部無文帯以下に無節Ｌ縄文を充填し、更に沈線区画による垂下する無文帯を作る。色調は暗褐色である。５は深鉢胴部で、ＬＲ縄文を磨り消し、微隆起で区画する。色調は暗褐色である。６は底部で、不安定で小さな底部から大きく広がる。文様は施文されていない。色調は淡褐色である。９は磨り石で、周囲の磨れ面が顕著である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

25. 029Ｐ（第18図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、18Ｐと重複する。17Ｐ、28Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.37ｍ×短軸1.22ｍの不整楕円の土坑で、深さは1.10ｍである。坑底はロームの床で平坦。小穴２基を検出している。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。検出した２基の小穴は、別遺構の可能性もあるが、判然としなかった。

遺　　物　覆土下層～上層にかけて少量出土した。１、２ともに深鉢口縁片で加曽利Ｅ式土器である。１は、狭小な口唇直下を磨り消し、ＬＲ縄文、色調は等褐色である。２は、ＬＲ縄文を施文し磨りけしによる狭小な口縁部無文帯を作り出している。内面は丁寧に磨かれている。色調は黒褐色で、焼成は良好である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。17Ｐとの新旧関係は明らかにしえなかった。また、坑底で検出した小穴２基についても、周囲で検出されている７Ｐ、11Ｐ、14Ｐなどとの類似性が窺え、別遺構の可能性もある。

26. 030Ｐ（第18図）

検出地区　Ｃ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、２Ｐ、13Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸0.50ｍ×短軸0.46ｍの不整円の土坑で、深さは0.45ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

覆　　土　暗褐色土系の覆土が１層であった。

遺　　物　遺物は出土しなかった。

所　　見　遺構の形状、覆土の観察等から縄文時代中期の土坑と判断した。同様の遺構に７Ｐ、11Ｐ、14Ｐなどがある。

27. 032Ｐ（第18図）

検出地区　Ｂ－４Ｇに位置し、調査区西側に所在し、７Ｐ、11Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸0.57ｍ×短軸0.52ｍの不整円の土坑で、深さは1.01ｍである。住居跡の柱穴のような形状である。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺　　物　覆土中から小片が３点出土した。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期の土坑と判断した。同様の遺構に７Ｐ、11Ｐ、14Ｐなどがある。

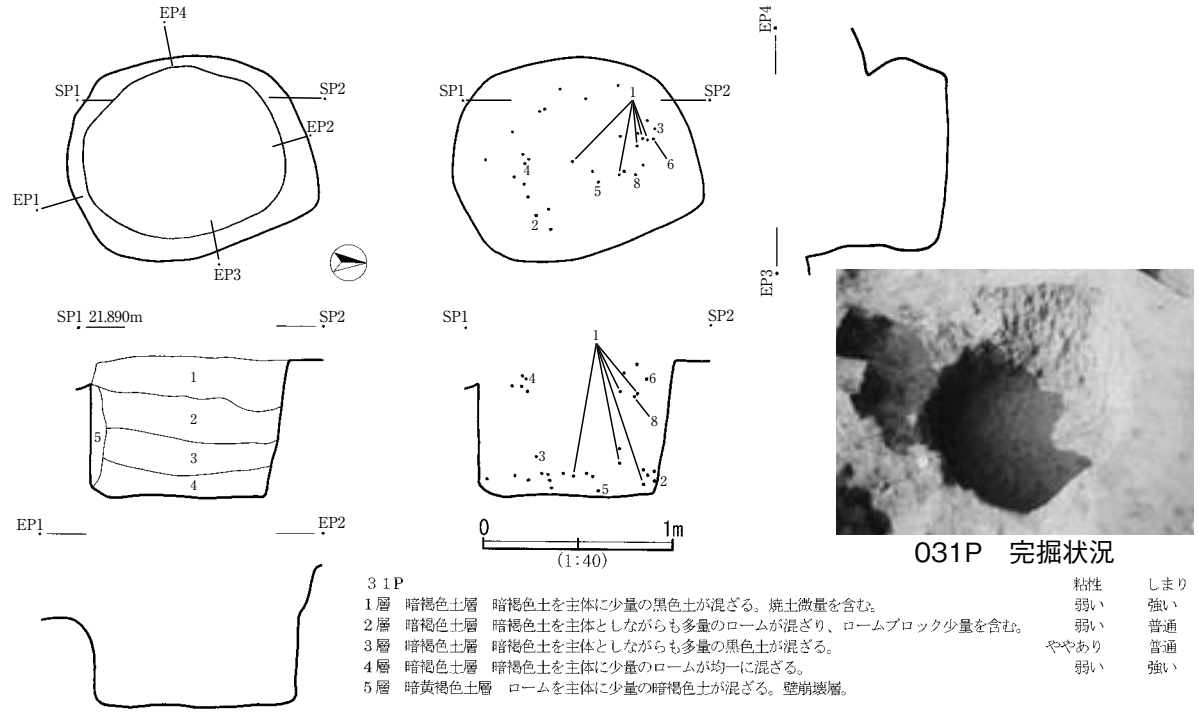
28. 031Ｐ（第19図）

検出地区　Ｄ－４Ｇに位置し、調査区中央に所在し、20Ｐと重複し、17Ｐなどと近接する。

遺　　構　長軸1.27ｍ×短軸1.05ｍの不整楕円の土坑で、深さは0.69ｍである。坑底はロームの床で平坦。壁もロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

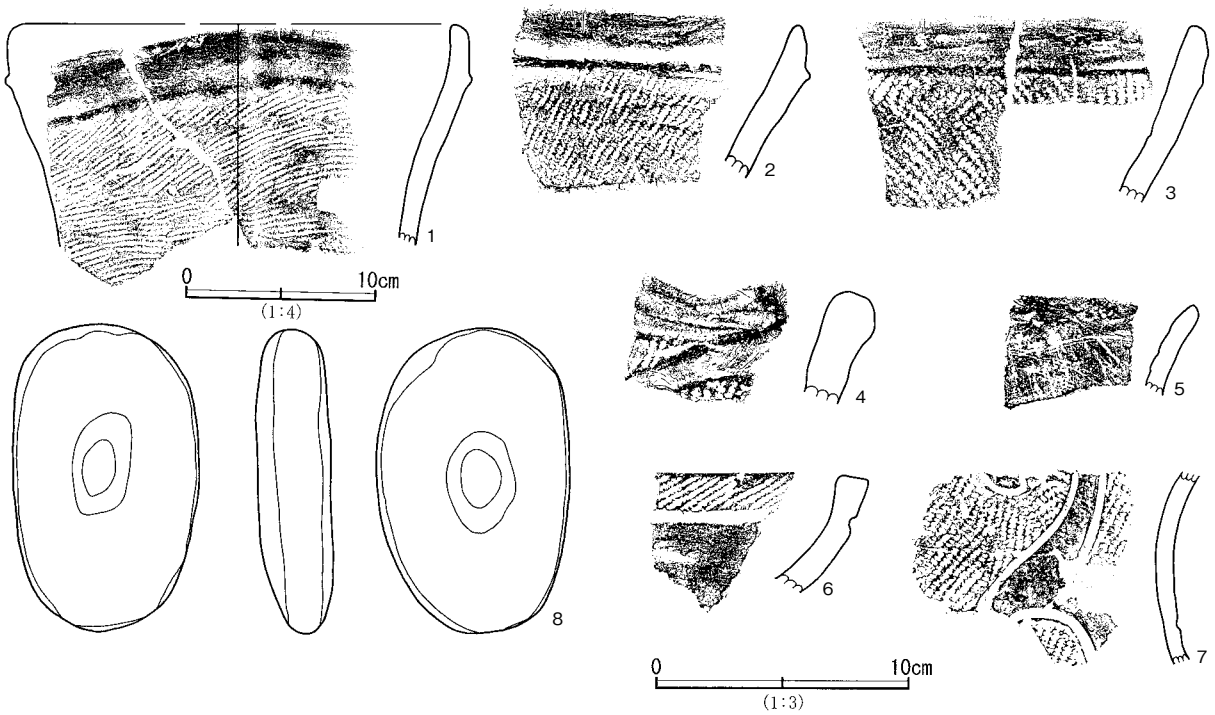
覆　　土　基本は５層に分層される。人為的な埋め戻しと考えられる。

遺　　物　覆土上層と下層とに分かれて出土した。１、２はともに平縁な深鉢口縁部で狭小な口縁部無文帯下端を微隆起によって区画し、以下、ＲＬ縄文を充填する。３も平縁な深鉢口縁部片で１、



３１Ｐ

		粘性	しまり
１層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量の黒色土が混ざる。焼土微量を含む。	弱い	強い
２層	暗褐色土層	暗褐色土を主体としながらも多量のロームが混ざり、ロームブロック少量を含む。	弱い	普通
３層	暗褐色土層	暗褐色土を主体としながらも多量の黒色土が混ざる。	ややあり	普通
４層	暗褐色土層	暗褐色土を主体に少量のロームが均一に混ざる。	弱い	強い
５層	暗黄褐色土層	ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。壁崩壊層。		



第19図　031P

２同様、狭小な口縁部無文帯下端を微隆起によって区画するが、以下をＬＲ縄文で充填する。４は波状を呈する深鉢口縁片ですり消しによる口縁部無文帯を作り出し、以下、ＲＬ縄文を充填する。５は、薄手で平縁の深鉢口縁片で無文部。ササラ状の擦痕有り。６は緩やかな波状を呈する深鉢口縁片でＲＬ縄文を横走させ、下端を沈線で区画し、以下、無文とする。７は、深鉢胴部片で、ＲＬ縄文を施し周囲を磨り消し、沈線で区画する。８は、磨り石で、周囲に磨れ面が顕著である。

所　　見　出土遺物から縄文時代中期後半の土坑と判断した。

第２節　中世以降

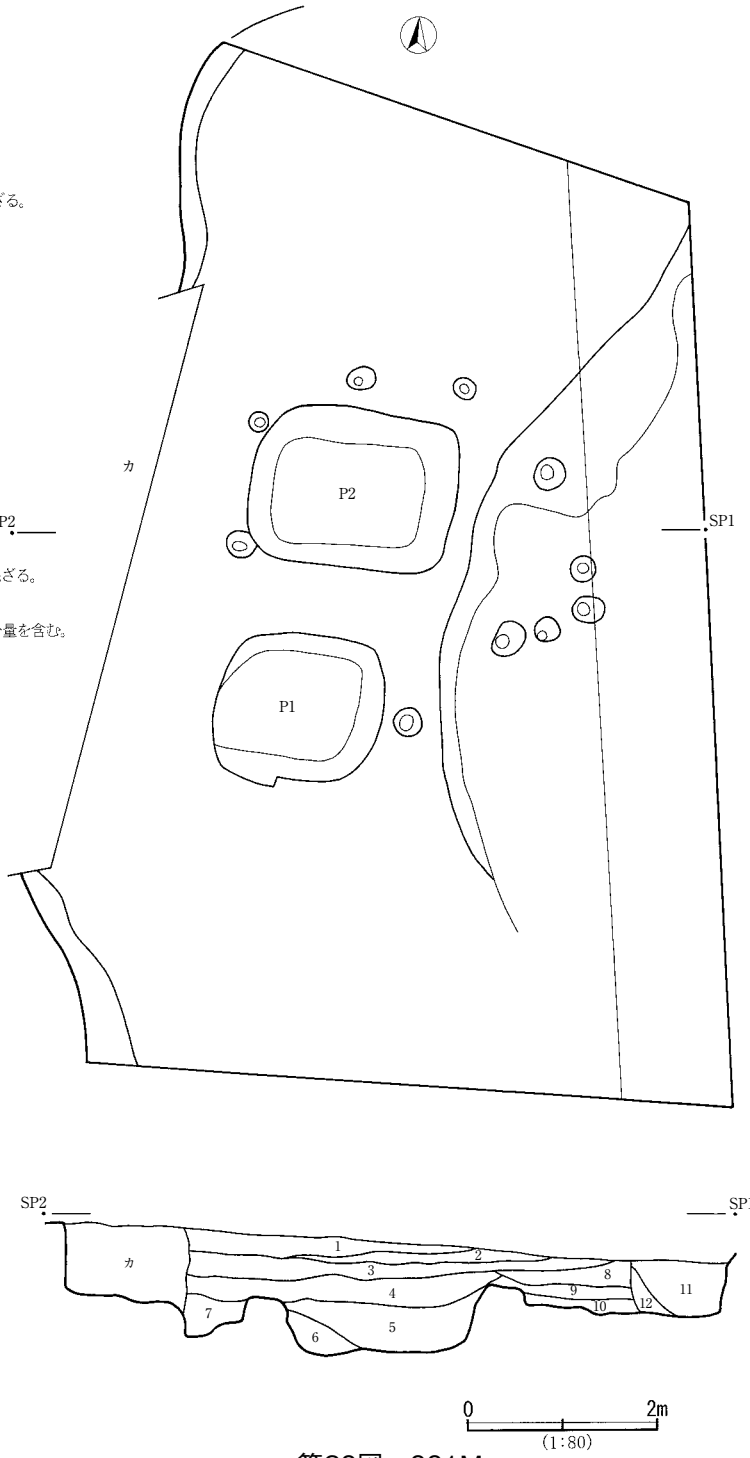
００１Ｍ
１ 層　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量の黒色土と微量のロームが混ざる
粘性　弱い　　しまり　弱い
２ 層　黒褐色土層
黒色土を主体に少量の暗褐色と微量のロームが混ざる。炭化物を微量含む。
粘性　弱い　　しまり　弱い
３ 層　暗赤褐色土層
暗褐色土を主体に少量のロームがまざり、焼土が全体的ににじむように混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い
４ 層　暗褐色土層
暗褐色土を主体にしながらも多量のロームと少量の黒色土が混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い
５ 層　暗黄褐色土層
ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い
６ 層　暗黄褐色土層
ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。ロームブロックを多量に含む。
粘性　弱い　　しまり　弱い
７ 層　暗黄褐色土層
ロームを主体に微量の暗褐色土が混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い
８ 層　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い
９ 層　暗黄褐色土層
ロームを主体としながらも多量の暗褐色土と多量のロームブロックが粗く混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い
10 層　暗褐色土層
暗褐色土を主体に少量の黒色土と少量のロームが混ざり、ロームブロック少量を含む。
粘性　弱い　　しまり　弱い
11 層　黒褐色土層
黒色土を主体に微量のロームと微量の暗褐色土が混ざる。
粘性　非常に弱い　　しまり　非常に弱い
12 層　暗黄褐色土層
暗褐色土を主体としながらも多量のロームと少量の黒色土が粗く混ざる。
粘性　弱い　　しまり　弱い

１．001Ｍ（第20図・21図）

検出地区　Ｄ－４Ｇ、５Ｇに位置し、調査区東側に所在する。

遺　　構　東側は調査区外へ伸び、西側は大規模に撹乱を受け、全体の様相は判然としなかった。また、東側は、近世と考えられる溝がほぼ平行した状態で重複していた。緩やかに落ち込み、最大で0.65ｍの深さを測る。底面はハードロームの溝底で、ほぼ平坦であるが微妙な起伏が多かった。

付属施設　溝底面に方形土坑２基と円形に回る小穴10基を検出した。



第20図　001Ｍ

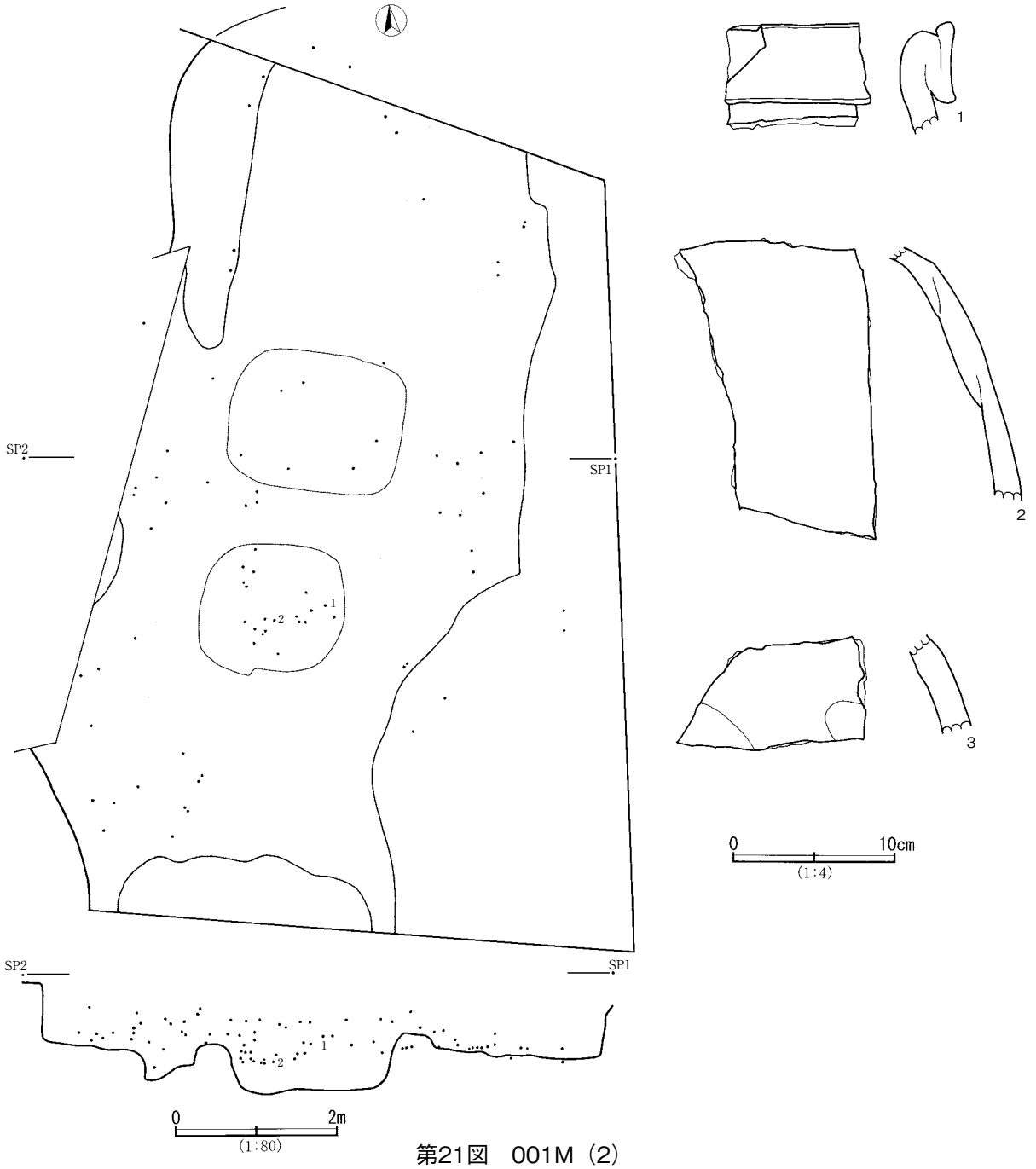
覆　　土　基本12層に分層され、３層は溝全面に広がる焼土層であった。溝最下層から焼土層までは人為的な埋め戻しが考えられ、それ以後、自然堆積による埋没が想定される。

遺　　物　溝覆土中から少量出土した。焼土層前後とＰ１、Ｐ２で集中的に出土した。１～３は、常滑焼の甕類である。15世紀の所産と考えられる。

所　　見　出土遺物から15世紀代の溝と判断した。

２．１号土坑（第22図）

検出地区　Ｂ－７Ｇに位置し、調査区南側に所在する。



第21図　001M（2）

遺　　構　南と西側は調査区外へ伸び、全体の様相は判然としないが、方形の土坑と考えられる。最大で0.7mの深さを測る。坑底はハードロームの床でほぼ平坦、壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。

覆　　土　基本４層に分層され、人為的な埋め戻しと考えられる。

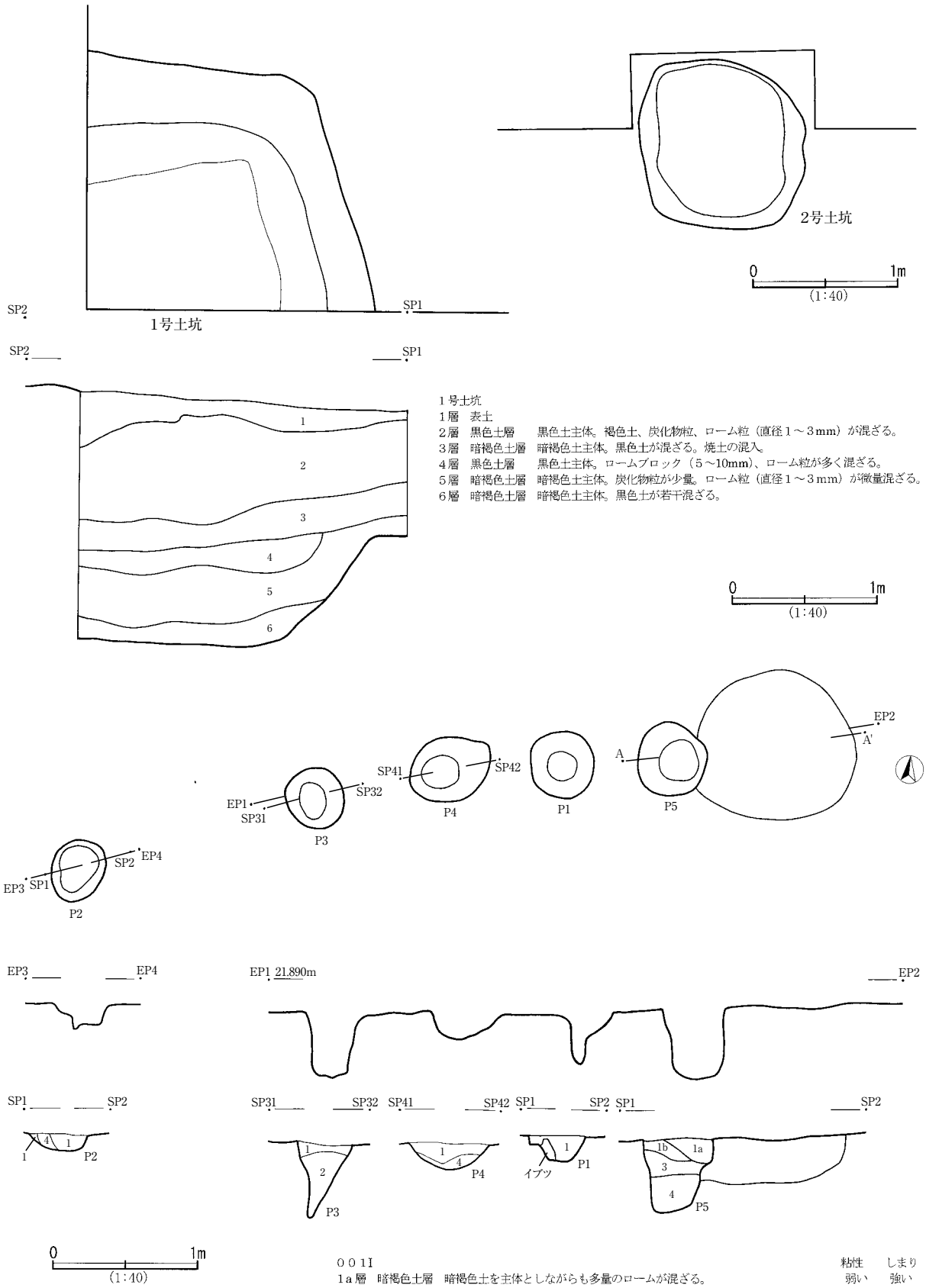
遺　　物　遺物は出土しなかった。

所　　見　遺構の形態、覆土の観察等から001M底面で検出された方形土坑と同性質の遺構と考えられ、15世紀代の土坑と判断した。

３．２号土坑（第22図）

検出地区　Ｂ－７Ｇに位置し、調査区南側に所在する。

遺　　構　長軸1.2m×短軸1.1mの不整円の土坑で、深さは0.1mである。坑底はロームの床で平坦である。壁もロームの壁で斜めに立ち上がる。ピット等の付属施設は検出されなかった。

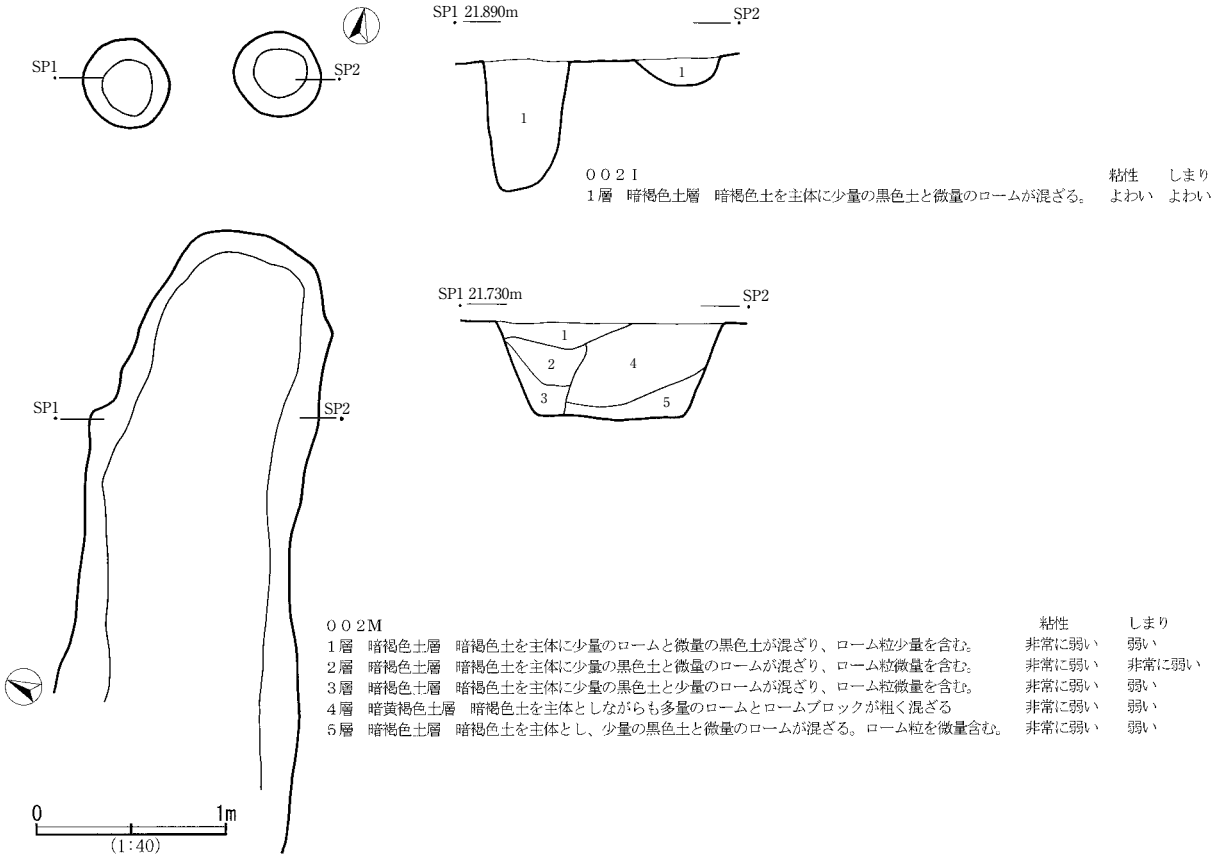


1号土坑
1層　表土
2層　黒色土層　黒色土主体。褐色土、炭化物粒、ローム粒（直径1～3mm）が混ざる。
3層　暗褐色土層　暗褐色土主体。黒色土が混ざる。焼土の混入。
4層　黒色土層　黒色土主体。ロームブロック（5～10mm）、ローム粒が多く混ざる。
5層　暗褐色土層　暗褐色土主体。炭化物粒が少量。ローム粒（直径1～3mm）が微量混ざる。
6層　暗褐色土層　暗褐色土主体。黒色土が若干混ざる。

001I

		粘性	しまり
1a層	暗褐色土層　暗褐色土を主体としながらも多量のロームが混ざる。	弱い	強い
1b層	暗褐色土層　暗褐色土を主体としながらも多量のロームが混ざる。ローム粒微量を含む。	弱い	強い
2層	暗褐色土層　暗褐色土を主体とし、微量の黒色土が混ざる。	弱い	強い
3層	暗褐色土層　暗褐色土を主体とし、少量の黒色土が混ざる。	弱い	強い
4層	暗黄褐色土層　ロームを主体に少量の暗褐色土が混ざる。	弱い	強い

第22図　1号土坑・2号土坑・001I



第23図　002Ⅰ・002M

遺　　物　遺物は出土しなかった。

所　　見　遺構の形態、覆土の観察等から中世以降の土坑と判断した。

４．001Ⅰ（第22図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在する。002Ⅰに近接する。

遺　　構　直径0.4m程度の小穴が４基連続している。

覆　　土　基本は４層に分層される。自然堆積と考えられる。

遺　　物　Ｐ１覆土から、中世の板碑片と思われる絹雲母片岩が出土した。

所　　見　遺構の形態、覆土の観察、出土遺物等から中世以降の柵列と判断した。

５．002Ⅰ（第23図）

検出地区　Ｃ－３Ｇに位置し、調査区北側に所在する。001Ⅰに近接する。

遺　　構　直径0.4m程度の小穴が２基連続している。

覆　　土　基本は１層に分層される。自然堆積と考えられる。

遺　　物　遺物は出土しなかった。

所　　見　遺構の形態、覆土の観察等から中世以降の柵列と判断した。

６．002M（第23図）

検出地区　Ｂ－５Ｇに位置し、調査区北側に所在する。

遺　　構　断面台形の溝で底部はほぼ平坦。壁は斜めに立ち上がる。

覆　　土　基本は２層に分層される。自然堆積と考えられる。土層断面で土坑のセクションを捉える。

遺　　物　覆土中から縄文土器の細片が少量出土した。

所　　見　遺構の形態、覆土の観察等から中世以降の溝と判断した。

第３章　成果と課題

縄文時代　縄文時代については、中期前半期（阿玉台式期）の竪穴住居跡１軒と中期後半期（加曽利E式期後半）の土坑28基を検出した。

竪穴住居跡については、炉の検出を見ていないが、出土遺物から阿玉台式１ｂ～２式にかけての遺物が出土していると、住居跡の形態が中央に柱穴と思われる小穴を１基検出していること等から、阿玉台式期の竪穴住居跡と判断した。検出された住居跡は１軒のみであるが、調査範囲が約400㎡という狭さを考慮すれば、周囲にさらに数軒の住居跡が検出される可能性があるだろう。阿玉台式期の遺物、集落については、今後の調査例の蓄積をまって更なる考察をしてみたい。

28基の土坑群に関しては、022Pは、覆土、形態・規模から考えて縄文時代の陥穴と考えられる。詳細な時期までは明らかにしえなかった。

022P以外は、中期後半～中期末の土坑で、加曽利E式の後半期に相当すると考えられ、出土遺物も比較的多量に出土した。出土遺物の大まかな分類として、

①、波状口縁で、狭小な口縁部無文帯を持ち、微隆起による区画を行い、逆U字型の文様構成を持つタイプの土器。017P、020P出土の土器。

②、沈線による区画を行い、短冊状の文様構成を持つタイプの土器。また、出土状況から、集合条線系の土器と共伴する可能性がある土器。013P、023P出土の土器。

③、口縁部の横走する縄文帯が沈線区画によって垂下するタイプの土器、恐らくは、西日本の影響を受けた土器。021P-１、027P-３出土の土器。

が、上げられる。上記の３タイプの土器は、恐らくは、それぞれ時期差、系統差を示しているものと考えられるが、所謂、中期末～後期初頭における土器編年上の論争もあり、加えて報告者自身にそれらを判断する力も無いことから、ここでは、事実関係の指摘に留めて、今後の課題としたい。

022P以外の土坑の形態については、２形態あり、

第１類、径0.6m前後、深さは0.7m程度で、住居の柱穴に類似する小形で深い形態。003P、007P、011Pなど６基。

第２類、長軸1.2m程度の短楕円もしくは不整円の平面形で、深さ0.8m前後の円筒形の形態。002P、004P、005P、013Pなど21基。

が有り、縄文土器の多数が第２類の土坑から出土している。

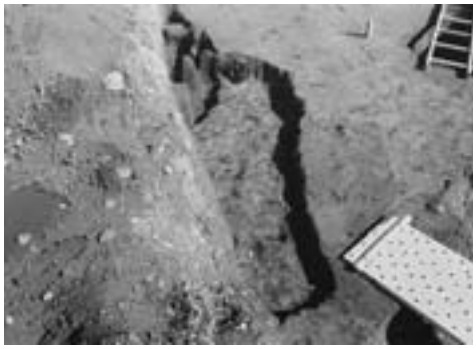
第２類の土坑については、形態以外にもいくつかの共通点が認められる。先ず、覆土の堆積状況であるが、基本的には、暗褐色土系の覆土であるが、下層にロームを多く含む層、中層に黒色土を多く含む層、上層にロームを少量含む層という堆積順序が窺え、更には、人為的に一気に埋めたものと判断される。遺物の出土状況については、覆土中層から上層にかけての出土が圧倒的に多い。大型破片、磨石、小形磨製石斧等は、覆土上層に出土する特徴的な出土状況を示していた。これらのことを踏まえ、第２類の土坑群は土坑墓の可能性があると考えている。ただし、貯蔵穴の転用なのか、専用の土坑墓だったのかは、判然としない。類例の増加を待って検討したい。中期後半～末の土坑群の八千代市内の類例としては、佐山地区の真木野向山遺跡（１）が挙げられる。

中世以降　　中世以降については、溝２条、土坑２基、遺構２基を検出した。中でも001Mにおいて15世紀代の常滑焼の甕類の大型破片が出土したことが特筆される。これまで、八千代市内で調査例の少なかった時代の事例とすることができた。

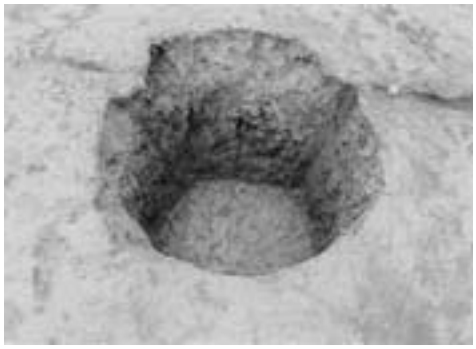
（１）大賀　健　　2008　『千葉県八千代市　真木野向山遺跡』　　八千代市遺跡調査会

完掘全景

001D　完掘状況

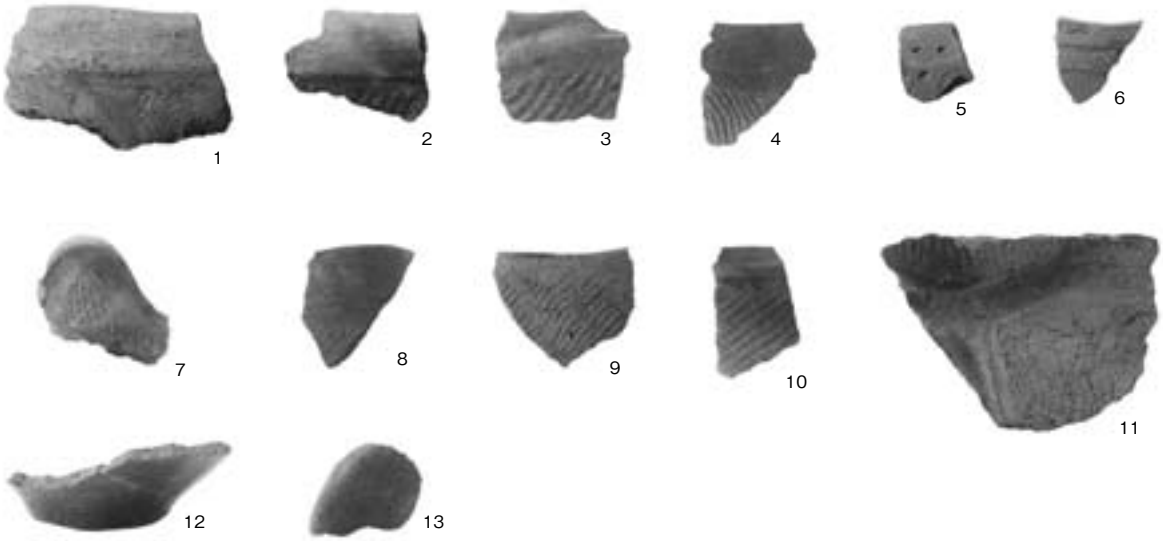


002D　完掘状況



002P　完掘状況

002D　出土遺物



002P　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばけんやちよし　かんのうまえはた　びーちてん　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	千葉県八千代市　桑納前畑遺跡ｂ地点　発掘調査報告書
編集者名	宮澤久史
編集期間	八千代市教育委員会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-２　TEL　047(483)1151
発行年月日	西暦2010年〈平成22年〉３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
桑納前畑遺跡ｂ地点（かんのうまえはたいせきちてん）	八千代市桑納字丸畑97番地３ほか（やちよしかんのうあざまるはたばんち）	12221	53	35度 45分 31秒	140度 ５分 50秒	第１次本調査 20090316～ 20090324 第２次本調査 20090818～ 20091104	14.61㎡ 389.94㎡	福祉施設建

所収遺跡	種別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特記事項
桑納前畑遺跡ｂ地点	集落跡 包蔵地	縄文時代 中世～戦国	竪穴住居跡　２軒、土坑28基 溝　１条、土坑２基、柵列２基	縄文土器、縄文時代石器 15世紀代　常滑焼	

要　約	桑納前畑遺跡ｂ地点第１次本調査・第２次本調査の発掘調査報告書で、福祉施設建設に伴う民間開発等発掘調査事業として八千代市が直営調査として実施した。 桑納前畑遺跡は、八千代市の中央からやや北寄り、桑納地区に所在し、市域を流れる桑納川の北岸に立地する。複雑にに入り込む小支谷に区切られている舌状台地に展開する遺跡でｂ地点はその平坦部に位置する。過去の周辺地点では、主に、縄文時代の土坑、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘建柱建物跡などの調査例がある。 今回、調査された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡２軒、土坑28基で、中世～戦国期の溝１条等であった。 これまでの調査では検出されなかった、縄文時代および15世紀代の遺構、遺物の調査が行われ、遺跡の新知見を得ることができた。

千 葉 県 八 千 代 市

桑納前畑遺跡ｂ地点発掘調査報告書

２０１０（平成22年）

発　行　日　2010年３月31日

編集・発行　八千代市教育委員会

〒276-0045　八千代市大和田138-２

TEL 047-481-0304

印　　刷　株式会社　マネジメント オオナカ